

目次

はしがき	田辺欧 1
------------	-------

第一部 北欧の詩

デンマーク編

Søren Ulrik Thomsen—*Det værste og det bedste* (2002)

XV Det bedste i min barndoms bundfrosne vintre.....	久木田奈穂 5
XVI Det værste er når en hemmelig dør i tapetet går op	高木愛奈 10
XVII Det bedste er langsomt at falde i søvn.....	河合明日香 15
XVIII Det værste er at få et kærlighedsbrev	高橋香 19
XIX København er bedst sidst i juli.....	永瀬さくら 24
XX Det værste er at det vældige lys	吉川夏緒 30
XXI Det bedste er når mørket som et blækblåt pulver løsnes.....	田辺欧 35

スウェーデン編

Karin Boye (1900-1941)の詩

Jag vill möta	影山翔士 39
I rörelse	新谷日和 44
Hur kan jag säga... ..	水崎千尋 48
Nattens djupa violoncell	松岡咲夏 52
Odyssevs vid masten.....	佐伯育美 56
De mörka änglarna.....	奥山津久海 61

第二部 卒業論文要約

デンマーク編

デンマーク文学に描かれる異界の役割とその変遷.....	高橋香 65
Den, der lever stille 『静かに生きる人』 作品研究 —「ケアの倫理」から読み解くオートフィクション—.....	永瀬さくら 68

スウェーデン編

エルサ・ベスコヴの絵本の絵を分析する.....	奥山津久海 73
物語作家ラーゲルルーヴの語りの特性 —小説『御者』における登場人物の語りを中心に—.....	水崎千尋 76

はしがき

田辺 欧

今年 2024 年の幕開けは最悪だった。元日に能登半島を襲った大震災。翌日起こった羽田空港での飛行機衝突事故。現場に居合わせずとも心に受けた衝撃は大きかった。11 年前の東日本大震災、29 年前の阪神淡路大震災の光景がまざまざと蘇った。なぜ地震はいつも寒い時期に起こるのだろう。津波にさらわれた人たちが今も冷たい海を彷徨っていることを思うと、関西ごときの寒さに震える自分が情けない。明日 2 月 5 日が最終授業となり、その後ゼミ論集の編集作業が予定されている。寒さが続くなかにも立春がおとずれ、いくばくかの温もりが感じられるようになることを願わずにはおられない。

今年度の第 1 期は新 3 年生の数がスウェーデン文学ゼミは 1 人のみだった。4 年生はスウェーデン、デンマークともにほぼ同数であった。そのため、第 1 期は学年別で、第 2 期は言語別でゼミを分けた。またデンマーク文学ゼミの方には、今年度は久木田さんが新たに院生として加わり、学部の授業の TA としても大いに貢献してくれた。第 1 期の 4 年生の授業はほぼ毎回卒論の進捗発表にあてたが、発表の舵取りが今ひとつうまくできなかった点は大いに反省すべきことである。一方 3 年生の授業では文学テキスト読解の基礎を学ぶことに時間を費やし、原語の文学テキスト読解までには至らなかったのが悔やまれる。その後夏休みを挟んで、複数名がスウェーデン、デンマークへと留学に赴き、複数名が留学先のデンマーク、スウェーデンから帰国した。メンバーが入れ替わったところで、第 2 期からは例年通り、言語別のゼミ運営にもどした。両ゼミとも、原語の詩を読み、訳し、解釈することから授業を始めた。デンマーク文学ゼミでは昨年引き続き Søren Ulrik Thomsen (セーアン・ウルリク・トムスン) の詩集『最悪なこと最高なこと』*Det værste og det bedste* を扱い、今年度でやっと 21 篇からなる詩集を訳し終えることができた。スウェーデン文学ゼミでは梅谷先生担当の講読の授業との協業を計画していたため、Karin Boye (カーリン・ボイエ) の詩集数編から代表作を選ぶこととなった。女性詩人ボイエの詩は、昨年の詩人オーケソンと同様、解釈に難儀する場面も多々あったが、いずれの担当者もボイエの思想にも触れつつ実に深い読みを披露してくれたのではないかと思う。この詩訳には、今年度はまだ休学中である影山くんも参加してくれたことが嬉しかった。

また今年度はスウェーデン文学ゼミ、デンマーク文学ゼミ共にそれぞれ卒論が 2 本ずつ、合計 4 本が提出された。それらの要旨もこのゼミ論集の最後に収められているので、3 年生はあらためて先輩たちの努力の賜物から大いなる刺激を受けてほしいと思う。

今年度は院生の久木田さんが編集作業の責任を担い、久しぶりにゼミ生がみな校正作業に関わってくれた。表紙はデンマーク語の 4 年生、永瀬さんが飾ってくれた。毎年文学ゼミには芸術的センスに溢れた学生さんが表紙を担当してくれる。今年の表紙にも春、そして新たな旅立ちを祝う趣きを感じさせる。久木田さん、永瀬さん、そしてゼミ生全員に心から感謝します。本当にありがとう。

第一部
北欧の詩

デンマーク編

Søren Ulrik Thomsen – *Det værste og det bedste* (2002)

XV

Det bedste i min barndoms bundfrosne vintre
hvor mørket masede mod ruderne og vinden bed som en hest
var rutebilens dirrende verden
af varme og lys og gyldent plyds

vi gravede Pjevs ned i Ninas have
i snestorm under en afpillet hyld
og det bedste er at snart vil den blomstre
som en duftende himmel over hans søvn

det bedste er hotellernes navne -
Metropolitan, Carlton, Kempinski og Ritz
Savoy, Bellevue, Excelsior, Park
Astoria, Grand og Atlantic Star

Imperial Garden, Palatz, Cosmopole
Paramount, Fønix, Hannover Hof
samt Royal Canadian Residence Tower

badestrandenes nedslidte tomhed
er bedst en mørknende dag i november
hvor lysene fra den anden side af sundet simrer

bedst kunne jeg tænke mig at skrive en salme
en vuggesang og en spionroman fuld af støvregn:

Det er det bedste for mig.

XV

子ども時代の凍てつく冬
暗闇が窓ガラスを押しつぶし、疾風が噛みつく
最高だったのは長距離路線バスの振動する世界の
 温もりと光とビロードの金色の座席

俺たちはニナの庭に猫の Pjevs を埋めた
吹雪の中、皮がはがれたニワトコの木の下に
最高なのは、まもなく花が咲いて
あいつが眠る上に香り高い空が広がること

最高なのは、ホテルの名前－
メトロポリタン、カールトン、ケンピンスキー、リッツ
サヴォイ、ベルビュー、エクセルシオール、パーク
アストリア、グランド、アトランティック・スター

インペリアル・ガーデン、パラッツ、コスモポール
パラマウント、フェニックス、ハノーバー・ホフ
ロイヤル・カナディアン・レジデンスタワー

 ビーチのわびしさは
11月の暗い日に最高だ
海峡の向こう側の光がゆらめくとき

思いつく最高のことは、賛美歌、
子守唄、霧雨に満ちたスパイ小説を書くこと：

 それが俺にとって最高なこと。

(久木田奈穂 訳)

1. はじめに

この詩は、暗くて寒いデンマークの冬をテーマとしていながら、そのなかにある最高だと思えるような事柄を描き出している。その際には対比の構造が多用されるほか、時間や空間的な広がりを感じさせる俯瞰的な視点も特徴的であるといえよう。以下では、その対比の構造や俯瞰的な視点について、簡潔な分析を試みる。

2. 対比の構造

第1連では、厳しく荒々しい冬の気候と、バスの中の温かみのある風景が対置されている。凍てつく冬の世界が外側から力強く窓に迫ってくることによって、バス車内の暖かい室温や柔らかい光、手触りの良い座席の温もりが際立つ。

第2連では、「俺たち」が荒んだ冬の庭の中に、愛猫の亡骸を埋葬する。この悲しく冷たい光景もまた、温かさと対比されている。「俺」は、季節が過ぎ暖かくなった庭に思いをはせ、墓の上に美しいニワトコの花が咲いて香りが立ち込めるさまを想像する。夏の庭の光景と愛しいものを偲ぶ温かな気持ちと、冬や死の暗く冷たさと印象的なコントラストを生む。

第5連では、11月のビーチが描写される。一般的にはこの時期のビーチは夏の賑わいが去った寂しいものと受け取られるが、「俺」はたいそう気に入っているようである。対岸の建物の光が澄んだ冷たい空気の中で揺らぎ瞬く光景は、静かでありながらきらめきを秘めている。ここでは、夏の暑く活気に満ちたビーチと11月の人気がなく寂しいビーチが対照されることで、寂しく物静かな趣きの中に美しさを見出す詩人の感性が光る。

これらのように、温かさと冷たさ、明るさと暗さ、そして夏と冬が対比されている構造は、北欧の世界観に通じるものを感じさせる。

3. 俯瞰的な視点①時間

この詩には冬という時期がテーマの基底にあるが、目下の冬とは異なる時期を暗示する表現が多数含まれていることで、時間的な奥行きが感じられる。まず、第1連の子ども時代の冬は過去の思い出なのであろうし、第2連の冬の日もまた過去形で綴られていることから、過去の出来事である

可能性がある。続いて、冬とは異なる時期を連想させるものには、第2連のニワトコの花が咲く夏、そして第5連のビーチが賑わう夏が挙げられよう。

4. 俯瞰的な視点②空間

この詩には空間にまつわるテーマも複数見出すことができる。

まず、第1連でのバスの描写は、第3, 4連にも関係していることが考えられる。詩集の挿絵をみると、列挙されているホテルの名前はバスに掲載された広告として描きこまれている。バスは交通手段として、そして旅行に駆り立てるものとして移動へと誘う。

続いて、境界を感じさせるものがある。第5連では、海峡の対岸が登場するが、光を発する街並みとこちら側のビーチは、海によって隔てられている。また、メタファーを含むものとして、生と死の境界が挙げられよう。第2連の死んでしまった Pjevs は死者の世界に渡ってしまった存在であり、今を生きる「俺」との埋められない距離は明白である。

最後に、精神的な意味における距離にも触れておきたい。第3, 4, 6連で扱われるホテルや創作物の名前は、ともに旅行や執筆を楽しむ姿を想像させるという点において、現実との距離感を生じさせる効果があろう。

5. 俯瞰的な視点③詩集全体との関係

詩集全体とこの詩の関係についても触れておくと、同詩集には第5連に登場した猫の名前である Pjevs がこの詩の他に2度登場したほか(VI, XII)、猫に触れたものが一篇(VII)ある。これらが同じ猫を指しているとすれば、「俺」は仔猫の頃にこの猫を迎えてから可愛がって共に生活をしてきたようである。この詩の第2連では Pjevs にまつわる詳しい描写は含まれていないが、本詩集を通して読んできた読者にとっては、愛猫を失った「俺」の悲しみの深さと思いやりの温かさが重みを増して訴えかけてくることであらう。

6. おわりに

これまで、対比の構造と俯瞰的な視点という2点に着目して分析を試みてきた。Søren Ulrik Thomsen は、対比の構造や俯瞰的な視点を駆使し、暗い世界にある一筋の光を巧妙かつ多面的に描き出す詩人であるといえよう。本稿で分析してきたように、この詩は、同じく *Det værste og det bedste* に

収録された他の詩と比較することや北欧の世界観を踏まえることで、さらに深く味わうことができるのではないだろうか。

XVI

Det værste er når en gådefuld drøm
hvor et ansigt i endeløs slowmotion vendes mod mit
ikke vil standse ved søvnens grænse
men fortsætter dagen igennem

venteværelser med brunt linoleum
matterede ruder og en duft af æter og gæld
er det værste

det værste er at du jo tigger mig om
at synes du er lige så liderligt lækker
som dengang vi to var sytten år

de dage hvor alle man ser på gaden er grimme
fordi man selv er godt grim indeni er de værste

det værste er når kalenderen er tung af aftaler

at finde et overkørt pindsvin
med indmaden væltende ud af den bløde bug
er det værste

det værste er når jeg ganske godt ved
at jeg selv har snydt en lille smule
for at opnå en lurvet gevinst:

Det er det værste for mig.

最悪なのは、謎めいた夢
ある顔がどこまでもゆっくりと俺の顔に向けられて
それは眠っている時にとどまらず
その日、一日中続くのだ

茶色いリノリウムが塗られた床の待合室
くすんだ窓ガラスとエタノールのにおいと借金
これらは最悪だ

最悪なのはお前が俺にすがってくること
私もまだいけるでしょ？って
俺たちが17歳だった頃と同じように

街で見かける人々全員が醜く見えてしまう日々
それが自分自身の内面がちょっと醜いせいだというのは最悪だ

最悪なのはカレンダーが予定でいっぱいになっている時

轢かれたハリネズミに出くわしてしまうこと
その柔らかい腹からは内臓が飛び出している
これは最悪だ

最悪なのは、俺が身に染みてよくわかっている時
自分がほんの少し不正を働いてるということを
つまらない利益を得るために：

これが俺にとっての最悪だ。

(高木愛奈 訳)

1. はじめに

この詩は、*Det værste og det bedste* の 16 番目にあたる詩で、作者の人生を悪くするものである‘det værste’(最悪なもの)が直接的に列挙されている詩である。一つの領域に属する事柄について書かれているのではなく、あらゆる領域の事柄を織り交ぜられている、ということが本詩の特徴として考えられる。ここでは、各連の分析を行いながら、本詩で挙げられている「最悪なもの」について一つひとつ明らかにしていきたい。

2. 各連の考察

第一連は、作者がおそらく見たのであろう、ある謎めいた夢について描写されている。‘gådefuld’(謎めいた)と表現されているが、夢の内容の説明に関して、‘en ansigt’(ある顔)という飾り気のない単語を主語に用いることで、読み手にも不可解な印象を与える。その謎の夢が一日中続くことが最悪だと作者は言う。見た夢のことが一日中頭から離れないといったことは、誰もが経験したことがあるだろう。作者にとっても夢に一日中囚われてしまうことは不快なことなのだ。

第二連は、四つの最悪なものが列挙されている。前半三つは、病院を髣髴とさせるものたちである。待合室、くすんだ窓ガラス、そしてエタノールのおいという言葉から作者の診察を待っている状況を言おうとされていると考えられる。また、四つ目に挙げられている‘gæld’(借金)だが、デンマークにおいて医療費は基本的に無料であるため、この語はおそらく「病院」とは関係がない。作者は、抱える様々な問題をこの‘gæld’という語で表しているのだ。

第三連は、作者のおそらくパートナーであろう女性について描写されている。‘dengang vi to var sytten år’(私たちが 17 歳だった時)では、作者と相手の間に何か特別な関係や体験が過去にあったことを示唆している。また、‘liderligt’(好色な)‘lækker’(性的魅力のある)という語から、その相手は、作者にとっての恋愛関係にある女性であることが推測される。その女性に、昔と変わらない気持ちを求められ、過去の関係を再び経験することへの作者の複雑な感情が示されている。

第四連は、他者への見方と自己評価についての内容である。人々が外見

的に醜いように見える日は、自分自身も内面的に醜いからだと述べている。自分自身が内面的に嫌な状態にある場合、周囲の人々も醜く見えるという考えを示している。ふつうは、実際に目に見えない自身の内面の醜さが、他人の外見の見方に反映されることで見えてしまう瞬間に対する感情が表現されている。

第五連は、カレンダーが予定でいっぱいになることが最悪だと述べられている。予定が詰まり、忙しさやストレスが増え、余裕がなくなることは作者にとって憂鬱なことなのであろう。

第六連では、かなり過激で不快なイメージが描写されている。特に、*‘indmaden væltende ud af den bløde bug’*(柔らかい腹から内臓が飛び出している)という表現は、非常に衝撃的な光景を想像させる。このような光景は人々に、心に残る強烈な印象を与える。作者は人生で不運な出来事の例として極端な状況を示すことで、何か不幸な状況に陥った時のショックや絶望を表現し、読者にも強い印象を与えていると考えられる。

第七連は、自分の良心に対する葛藤が表現されている。不正をして利益を得ようとしていることを自分でよくわかっていることが最悪だと述べている。また、その不正がつまらない利益しかもたらさなかったことに、その行為の意味の無価値さを示唆している。そして、その利益が得られた代償として、内面的な喪失感や後悔という結果しかもたらさないということを暗示していると考えられる。最終的に、その不正という行動が作者にとっての精神的な重荷や負担となっていることが最悪なのだろう。

以上がこの 16 番目の詩で挙げられている *‘det værste’*(最悪なもの)である。

3. まとめ

この詩では、1 章で述べたように、夢と現実、過去と現在、自己評価と他者への見方など、あらゆる領域の要素が交錯している。作者の心の葛藤や苦悩、そして様々な状況に対する感情を様々な場面やイメージを通じて表現している。作者にとって最悪なものとは、日常においてあらゆる場面で出くわすものであり、身近な存在なのであろうと私は考えた。また、一般的に不快なものと考えられる事象をも描写することで、読者に対して共感を求めているのではないだろうか。

インターネット上の資料

Forfatterweb.<https://forfatterweb.dk/oversigt/thomsen-soren-ulrik/zsuthomsen06>(2024年1月14日最終確認)

XVII

Det bedste er når det akkurat lykkes
at udholde hjertets hamren i brystet
og med et ånde letet op

den dag jeg sad forrest på stangen af fars høje cykel
og han slog regnslagt ud over styret
så jeg svævede trygt til lyden af hjulenes susen
og dråbernes prikken over mit hoved var bedst

det bedste er lufthavnes vægløse verden
hvor alle steder mødes i intet

ord som jernlunge, syvsang og pontifikat
samt skarlagen, mosegris-og sarkofag
er de bedste

det bedste er at sidde og blade distræt i en bog
mens man lytter til springvandets plasken i parken

for nu er det maj og igen må man spørge sig selv
om valmuens fornemrne nikken
eller mælkebøttens lille, vilde brand er bedst?

det bedste er at jeg selv på de værste
dage er nysgerrig efter i morgen

Det er det bedste for mig.

最高なのは、胸を押しつぶすものにうまく耐え切り、
ほっと息をつくときだ

お父さんの高い自転車についた棒の先に座って
彼がハンドルにレインカバーをかけたあの日
車輪のギリギリ音と俺の頭に落ちる水滴の音を聞きながら
安全に揺られていたことが最高だった

最高なものは、全ての場所が何にもないところで
出会うような空港の無重力の世界

鉄の肺、7つの歌、教皇といった言葉
緋色、湿地の豚、そして石の棺も同様だ
これらは最高だ

最高なのは、座ってぼんやりしながら本をめくること
公園で噴水の水が跳ねているのを聞きながら

なぜなら今やもう5月だ、そして
ヒナゲシが美しく風に揺れていることか
タンポポの小さい野性の花が炎のように咲き誇ることの
どちらが最高なのか？ということについて
考え直さなければならない

最高なことは、最悪な日でも俺自身が
明日に興味があるということだ

これが俺にとって最高だ。

(河合明日香 訳)

1. *Det værste og det bedste* 17 番目の詩について

本詩では、作者のトムスンにとって最高なものについて描かれている。最初の連で抽象的な概念、2連目で具体的な過去の出来事、3連目と4連目では具体的ではありつつも、名詞句だけで構成された一度読んだだけでは意味が取りづらい内容、5連目と6連目では具体的かつ状況描写も容易な現在の出来事、7連目で再度抽象的な概念、8連目ですべての詩に書かれている決まり文句を入れる、というスタイルが取られている。抽象から具体の描写がはっきりと分かれており、更に具体の中でも2連目と3・4連目と5・6連目で異なるテイストを持つ。これらのバランスが丁度良く、どこかひとつの連の印象が強くなりすぎることがない。読む連によって読んだときの印象が全く異なる、読み応えのある詩である。

更に奇数連目は *det bedste* から詩が始まり、第8連目を除く偶数連目は *bedst* (或いは *bedste*) で終わっているところにも、筆者のこだわりを感じる。

2連目では雨の日に父の自転車に乗り、その時に聞いた音が「最高だった」と述べられている。しかし音を中心とした描写であるにも関わらず、雨の日ならではのどこか静かで落ち着いた、ほっとするような雰囲気を読み取ることができる。

この連は、現在形の動詞ばかりが使われているこの詩の中で唯一過去形が使われている箇所、彼の父親との思い出が如何に特別で大切なものであったかを窺うことができる。

3連目では「全ての場所が何も無いところで出会う」「空港の無重力の世界」という一見現実にはあり得ないようなものが描写されている。しかし細かく考察してみると、筆者の描きたいものが見えてくる。

空港の無重力の世界とは、様々な国の人が集まり自分のバックグラウンドが無視されるような、或いは搭乗ゲートを過ぎればどこの国にもいないような、まるで足元が浮いたかのような不安定な状態になる空港の特殊さを表していると考えられる。そして精神的な場所も含め、あらゆる場所が空港という不安定なところで出会う＝つまり不安定な場所に居場所を見つ

けるということを示しているのではないだろうか。一見不安定な場所に居場所を見つけることは良くないことのように思えるが、自分の過去の一切を考えなくて良い場所に身を置くことは時に安心して繋がり得る。

4連目は単語が7つ羅列されている箇所です。これらの単語の意味や発音に共通項は見られない。詩の中心にあたる第4連目で、後半の明るい表現に入る前のスパイスのような役割を果たしている。

3・4連目は共に名詞句、或いは名詞のみで構成されており、読者に淡々とした印象を与える。

5連目では、公園の噴水付近で本を読んでいる風景がありありと浮かんでくる。

続く6連目は、5月の自然の中で、美しく風に揺れるヒナゲシか、小さく咲き誇るタンポポのどちらが最高なのだろうかについて悩む情景が目に浮かぶような内容となっている。

寒く暗い冬が長く続くデンマークでは、暖かく明るい春はとりわけ喜ばしいものである。他の連や詩にしばしば見受けられる遠まわしで難解な言い回しをせず、比較的分かりやすいデンマーク語で書かれたこの連からは、純粋に麗らかな春を楽しんでいる筆者の様子を窺うことができる。

また5・6連目は3・4連目とは異なり、文で構成されている。そのため、先程の連に比べると温かい印象を読者に与える。

2. まとめ

特殊な構造である2・4連目での描写を除き、筆者は苦しい状況が良い状況に変わる時に最高だと感じる人が多いと分かる。

例えば、1連目では緊迫した状態から安心した状態になることが、3連目では日常から離れて異世界のような場所に行く瞬間が、5,6連目では厳しい冬から移り変わった春の出来事が、最高だと描写している。

そのため7連目のように、たとえ今日が最悪な日であっても、次の日には良いことが起こるかもしれない、という希望を見出すことができるのではないだろうか。

XVIII

Det værste er at spille sig selv
for at undgå at tabe sit stakkels ansigt

gensynet med et gyseligt digt
jeg gudhjælpenig selv har skrevet er værst

det værste er at tandhalsene
så småt er begyndt at grine fra gummen

undergrundstog der pludselig standser i mørket
+„livskunstnere” er bare det værste
og det samme er det at sidde kede
sine knogler til grus ved kulturkonferencer

det værste er til sidst indse
at man forlængst har mistet respekten
for en mand man allerhelst vil beundre

at alting stadig kan ske er det værste

det værste er alle de genfærd
der flakker om i min lejlighed efterhånden;
slingrende skridt fra dig jeg har svigtet
et strejf af det sødlig åndedræt
fra én der virkelig ville mig ondt:

Det er det værste for mig.

XVIII

最悪なのは自己を演じること
ろくでもない面目を失わないようにするために

ぞっとする詩との再会
あろうことかそれを俺自身が書いたというのが最悪だ

最悪なのは歯の付け根が
少しずつぐらぐら笑い始めること

闇の中で地下鉄が突如停止する
プラス「丁寧な暮らし」はただただ最悪だ
そして同じくは退屈して座っていること
文化フォーラムで粉々になった骨で

最悪なのは結局は悟ること
人はとうに敬意を失っていたと
最も尊敬したい男に対しての

全てがいまだ起こり得るということは最悪だ

最悪なのはありとあらゆる亡霊
次々と俺のアパートをうろつきだす
俺が見捨てたお前の覚束ない足取り
甘ったるい息遣いが微かに触れる
本当に俺を痛めつけようとしたヤツが

それが俺には最悪なんだ

(高橋香 訳)

1. はじめに

Søren Ulrik Thomsen の詩集 *Det værste og det bedste* 『最悪なものと最高なもの』の 18 番目に当たるこの詩には、日々の生活で「最悪だ」と感じる瞬間が書き連ねられている。特に、「俺」の過去や未来と深い関連性を持つ出来事が数多く登場している。また、突如として起こる出来事によってもたらされる「最悪なもの」や、それとは逆に徐々に進行する出来事も見出すことができる。そこで本稿では、時間の流れの描かれ方という点に注目し、この詩の特徴を明らかにすることを試みる。

2. 現在から見た過去と未来

この詩の中の過去及び未来の出来事は、どちらも現在の視点から描かれる。以下で具体例を挙げながら、それぞれの情景を紐解いていく。

第 2 連では、「俺」自身が過去に執筆した詩が登場する。この詩はぞっとするようなものであるらしく、詩の執筆が現在の「俺」にとって喜ばしい過去ではないことがうかがえる。

また、第 7 連で描かれるのは、「俺」が見捨てた「お前」の存在である。「痛めつけようとした」と過去形で述べられている点を踏まえると、この連に登場する亡霊たちは、過去に由来するものであることが推測できる。過去に捨てた「お前」がパートナーなのか、それとも家族なのかは明言されていないが、現在の「俺」を苦しめるイメージになっていることは確かだろう。過去の経験が今になって「俺」を煩わすというところは、第 2 連と共通している。

一方で、未来もまた、現在の「俺」にとって最悪なものである。第 1 連は現在の状況を描写しているようにも読めるが、「面目を失わないようにする」という目的は、面目を失った未来の状況を想像するが故の行動かもしれない。第 6 連では、全てがいまだ起こり得ることを最悪だとしている。現在から未来を見て、何が起こるのか全く予測のつかない事実を憂いているのである。

このようにして、現在にまで影響を及ぼす過去や、予測不可能な未来が、詩全体に散見される。過去と未来がどちらも良いものではないという事実

を突きつけることで、それぞれの情景の苦々しい印象を深めているといえる。

3. 突然の出来事と徐々に進行する出来事

時間の流れに関連する着目点としてもう一つ取り上げたいのが、出来事の進行する速度である。例えば、第4連では‘pludselig’という単語が用いられている。これは「突然に、急に」と訳される語で、「素早く起こる、予期せず起こる」といった意味合いを含んでいる。地下鉄の停止が瞬く間に起こったというだけでなく、「俺」の予測していない出来事だったことがうかがえる。予測できないものが最悪だとして描かれる点は、前述した第6連とも通じるだろう。

しかし、同じ連で語られる退屈した様子は、地下鉄の停止とは対照的である。この光景には、急停止のような急激な動きは存在しない。また、退屈しているという心境からは、興奮を巻き起こすような出来事が起こらないであろう状況が推測できる。予測不可能な何かが無いという点でも、地下鉄の動きとは大きく異なる。

段階的に進行する出来事は、他の箇所でも描かれる。第7連で、アパートの亡霊は「次々と」うろつき出す。該当箇所は、原文では‘efterhånden’と表現されており、この単語は「次第に、だんだんと」という意味で用いられる。亡霊は突如として湧きだしたのではなく、徐々に動き出した存在であることがわかる。そして、この亡霊と関連付けられているのが「息遣いが微かに触れる」という短い時間の出来事である。ここでも、出来事の進行速度の対比が際立っている。

4. おわりに

本稿では、過去と未来、出来事の進行速度という二点に焦点を当て、詩の中で時間の流れがどのように描かれているかをみてきた。全体を通して読むと、二つの要素は、一見相反するものに思える。しかしながら、対照的な二つはどちらも等しく最悪なものとしてされている。このことが、詩全体に漂う失望や閉塞感を、より効果的に描き出しているといえるのではないだろうか。

また、本稿では考察できなかったが、この詩には、詩集に収録された他の詩との関連性が指摘できる部分も存在する。対照的なものを描いている点は他の詩とも共通しており、繰り返し登場するモチーフも見られる。一

例をあげると，‘du’と書かれる人物は，各詩で同一人物かは定かではないものの，最高なものとしても，最悪なものとしても度々言及されている．最悪なものとは最高なものという正反対の二つに共通点を見出せるところは，今回取り上げた一編の描かれ方とも通じているといえる．

参考文献

廣野由美子．2005．『批評理論入門』．東京：中央公論新社．

インターネット上の資料

pludselig. Den Danske Ordbog.

<https://ordnet.dk/ddo/ordbog?query=pludselig>(2024年1月15日最終確認)

XIX

København er bedst sidst i juli
hvor alle er rejst og telefonen holdt op med at ringe
og man går halvnøgen rundt på sin fjerdesal
og hører Stan Kenton mens vinden tar i de våde træer

de tre bedste bøger i mine forældres reol
var Billedbiblen af Gustave Doré
Erotikkens historie og Hjemmets lægebog (bind I-V)

Det bedste er at synke ned i et skoldhedt karbad
og at tiltræde rejsen i morgenens mørke

mirakuløst at finde en filmplakat
man har ledt efter siden '73 er det bedste

det bedste er at vågne med panden
hvilende mod din varme nakke

at alting stadig kan ske er det bedste

det bedste er tagenes skorstensskov
hvor antenneres sære skrifttegn vokser

at der hele tiden har været lidt mere
af "det bedste" end af "det værste" er bedst:

Det er det bedste for mig.

コペンハーゲンは、7月末が最高だ
誰もが旅行に出かけ、電話も鳴り止む
アパート5階の部屋を半裸で彷徨く
濡れた木々に戦ぐ風と、スタン・ケントンのピアノの音色

親の本棚にある最高の本3つ
ギュスターヴ・ドレの聖書画集
エロティシズムの歴史、家庭医学事典（第1巻～第5巻）

最高なのは、火傷しそうなほどの熱い湯に浸かること
そして朝の暗闇の中、旅に発つこと

奇跡的に映画のポスターを発掘したことは最高だ
73年から探し続けていたんだ

最高なのは、額の感触とともに目覚めること
お前の温かい首筋うなじに預けていた

この全てがまだ起こりうるということが、最高だ

最高なのは、屋根に生える煙突の森
アンテナが象る奇妙な文字が伸びている

「最悪だ」よりも「最高だ」のほうが
いつも少しだけ多いということが、最高だ

それが俺にとって最高なこと。

（永瀬さくら 訳）

1. はじめに

この詩は、セーアン・ウルレク・トムスン (Søren Ulrik Thomsen, 1956-) による *Det værste og det bedste* 『最悪と最高』(2002) の 19 番目、「最高なこと」について綴った詩である。人気イラストレーターイブ・スパング・オールスン (Ib Spang Olsen, 1921-1012) により、見開きの左側には物が溢れる部屋でマグカップを片手に窓の外を眺めたり、バスタブに浸かったりしてくつろいでいる男性の姿が描かれ、右側には髪の高い女性の寝顔が描かれている。

トムスはデンマークの片田舎で生まれ、16歳のときに家族とともにコペンハーゲンへ引っ越した。忙しなくも洗練された都市の雰囲気によって圧倒されたトムスは、都市での孤独や疎外感をテーマとした詩集 *City Slang* 『シティ・スラング』(1981) で詩人としてデビューを果たした。このように、トムスの詩を読み解くにあたって、都市というテーマは欠かせないものである。

また、この詩も含め『最悪と最高』に収められている詩には、非常に具体的な物事が綴られている。とりわけこの詩では、他の詩に見られるような対比構造は見出せず、個人的な事柄が羅列されている点も特徴の一つである。オールスンによる挿絵も、身近で具体的な風景が描かれている。

そこで本稿では、「都市の情景」、そして「具体的事象の羅列」という 2 点に着目しつつ分析する。

2. 詩の分析

2.1. 都市の情景

第 1 連、第 7 連では、「最高なこと」として都市コペンハーゲンの情景が描き出されている。しかしここで立ち現れるのは、典型的なコペンハーゲンのイメージとは異なる姿である。

第 1 連には、雑踏行き交う都会的な賑わいではなく、むしろ人気の少ない落ち着いた雰囲気が漂っている。皆が休暇に出かける 7 月末のコペンハーゲンでは、都会の喧騒も息をひそめる。煩わしい人間関係からも、このひと時だけは解放される。夕立だろうか、通り雨に降られた木々に戦ぐ風

の音や、スタン・ケントン¹が奏でるジャズピアノの軽快な音に耳を傾ける余裕がある。

第7連で描かれるのは、屋根に設置されている煙突が、まるで森の中に鬱蒼と茂る木のように聳え立っている風景である。アンテナは、読めそうで読めない文字を象って立っている。トムスはこの人工的な情景を、「森 (skov)」や「成長する；(草木が) 生い茂る，育つ」という意味を持つ「伸びている (vokser)」という言葉で表現している。煙突やアンテナが濫立する無機質な都市の風景から、トムスは森の静けさや植物の持つ生命力を思い起こしているのだ。

このようにトムスは、都市に潜む静けさや自然の息遣いに耳を澄ましている。その背景には、彼の生い立ちが影響しているだろう。トムスはシェラン島南東部の海岸沿いステウンス・コムネ (Stevns Kommune) にある、人口わずか 4000 人にも満たない町ストア・ヒズィング (Store Heddinge) で育った。トムスはこの町のことを “Store fucking Heddinge” と呼び、初期の作品ではこの生い立ちから距離を置いていた。しかしのちのインタビューで、「大人になるにつれて、ステウンスの風景が私の中のどれほど深いところにあるのかわかった」²と述べている。

どれほど都市の生活に染まろうと、トムスの根底には田舎の情景が染みついている。それゆえに、彼が紡ぎ出す「最高」のコペンハーゲンは、都市でありながらもどこかひっそりとした穏やかさを湛えたものになっているのだろう。

2. 2. 具体的事象の羅列

第2連から第5連では、具体的な事柄が書き連ねられている。それぞれの連同士で関連性は見出せず、対比構造も持っていない。他の詩では具体的な事柄だけでなく、抽象的な要素も組み合わせられているものもある。しかしこの詩においては、トムスンにとって「最高なこと」が、本の題名や73年、二人称代名詞「お前 (din)」といった具体的な言葉で紡ぎ出されているだけである。

この具体的事象の羅列について、デンマークにおける文学の百科事典サイト Forfatterweb では、「それは生，死，芸術について普遍的なことを言お

¹ スタン・ケントン (Stan Kenton, 1911-1979) はアメリカ出身のジャズピアニスト。自らバンドを率いて、作曲・編曲家として数多の楽曲を手がけた。ウエストコースト・ジャズの大きな潮流をつくった一人である。

² Jeg brød mig ikke særlig meget om det sociale liv i provinsen, men som voksen er det gået op for mig, hvor dybt det stevnske landskab har sat sig i mig.

うとする試みではなく、日々を満ちし、そのひとに跡を残す人生の大小の出来事を留めようとしたものである」³と分析されている。すなわちトムスンは、この詩集を通して普遍的なテーマを探究しようとしたのではなく、日常に溢れるあらゆる事象を詩として留めておこうとした。なぜならひとつひとつの出来事がそのひとを形作っているからだ。

また、この詩集は販売部数2万部を超え、この記録はデンマークの詩集としては前例のないことであった。その背景には、具体的であるがゆえにイメージがしやすく、親しみやすいという点もあるだろう。しかし、これほどまでに人気を集めたのは、やはり多くの人々がトムスンの紡ぐ言葉に共感したからではないだろうか。たしかにトムスン個人にしかわからないような固有名詞や数字は数多く現れるが、その個人的かつ具体的な描写の奥深くに込められた感情や情景は普遍的なものである。特に第5連において、ここでは「お前」という特定の人物が想定されているが、愛する人の首筋⁴に預けていた額の感触とともに目を覚ますというぬくもりに満ちた感覚は、普遍的に受け入れられるものであろう。

3. 考察

第8連では、この詩集全体のテーマと言えるものが綴られている。トムスは詩集の題名の通り、「最悪」と「最高」をテーマにした詩を交互に並べている。「最悪」についての詩が10編、「最高」についての詩が11編で、第8連にあるように、まさしく「最悪だ」よりも「最高だ」のほうが少しだけ多くなっている。

ここでトムスは、「最悪なこと」がないことが「最高だ」と言っているわけではないことに注目すべきだろう。あくまでも、最悪なことよりも最高のことのほうが「いつも少しだけ」多いことが、最高なのである。つまり、最悪と最高を繰り返しながら、それでも「最高なこと」をほんの僅かでも多く見出すこと、それがトムスンにとっての「最高」なのである。「最高」だけを見るのでもなく、「最悪」だけを見るのでもなく、その両者を見つめる眼差しをもっているからこそ辿り着ける「最高なこと」ではないだろうか。

³ Det er ikke et forsøg på at sige noget almengyldigt om livet, døden og kunsten, men at holde fast i de store og små ting i livet, der fylder dagene og sætter spor i personligheden.

⁴ 「首筋」は「首の筋」と書くため、首の前の部分や、前後を含めた首全体を指すように思われがちだが、正確には「うなじ」と同じで首の後ろの部分指す。

したがって第 6 連の「この全てがまだ起こりうるということが、最高だ」という一行も、単に楽観して言っているわけではないということがわかるだろう。18 番目の詩において対比となる一行が登場しているように、この言葉の裏には、最悪なことも同様にまだ起こりうるという意味が隠れている。しかし第 8 連をふまえると、この一行にはトムスンの仄かな希望が灯されていると考えることができるだろう。第 6 連のたった一行が、何も見えない暗闇でも目が眩むほどの光でもなく、まるで一縷の光のようにこの詩集を照らしているように思えてならない。

参考文献

Sørensen, Rasmus Bo. 2011. “Noget af Søren Ulrik Thomsen.” Information.

2024 年 1 月 15 日閲覧.

<https://www.information.dk/kultur/2011/02/soeren-ulrik-thomsen>

Vindum, Anne. 2016. “Søren Ulrik Thomsen.” Forfatterweb. 2024 年 1 月 12

日閲覧. <https://forfatterweb.dk/oversigt/thomsen-soren-ulrik>

XX

Det værste er at det vældige lys
fra terminal 13s blændende ruder
og synet af en sammenklappet
sommerfugls lille sorte barberblad
pludselig får mig til at græde

indfaldsvejenes uvirkelige verdener
af Tæppelande i trøstesløs sol
er det værste

det værste er når man ikke længere
rigtig finder det umagen værd
at barbere sig før man går ned efter mælk
hviske et ønske til vinden

at aflyse i sidste øjeblik er det værste

det værste er blikstille provinsbyer
hvor kunstmuseet og thaibordellet
holder weekendåbent sommeren over
og en falmet plakat fortæller
at Suzi Quatro spiller til havnefesten

hele mit liv har jeg frygtet
at åbne en dør og finde dig død:

Det er det værste for mig.

最悪なのは

13番ターミナルのまばゆい窓からさす膨大な光と
潰れた蝶の
小さく黒い剃刀の刃の光景が
突如俺を涙させること

荒涼とした太陽に照らされたカーペットランドが見せる
幹線道路の現実味のない世界は
最悪だ

最悪なのは

もはや労力の価値を見出せないこと
牛乳を買いに出かけるまえに髭を剃ることや
風に願いをささやくことに

最後の最後になって中止だなんて最悪だ

最悪なのは波風が立つこともない静寂の地方都市

美術館とタイ人娼館は

夏のあいだ週末だけ営業していて

色褪せたポスターが告げている

ハーバーフェスティバルにスージー・クアトロがやってくる、と

俺は一生恐れている

ドアを開けてお前が死んでいるのに気づくことを

それが俺にとって最悪なこと。

(吉川夏緒 訳)

1. 詩について

この詩は *Det værste og det bedste* の 20 番目の詩であり、作者の ‘det værste’ (最悪なもの) について扱ったものである。本稿では、詩を三つに分け、各連の分析と部分ごとの考察を行いつつ、詩全体の解釈について探っていきたい。

2. 第一連・第二連

【各連の分析】

第一連ではコペンハーゲン空港のガラス張りのターミナルを想起させる場面が描かれる。時間帯は明示されていないため、窓からさす光というのが昼の太陽を反射した光なのか、暗い夜道に煌々と光るターミナル内の照明なのかは判然としない。太陽光に眼を眩ませたのか、それとも誘蛾灯のような照明に誘い込まれたのか、一匹の小さな黒い蝶が窓に激突して潰れている。さまざまな人がさまざまな場所へと飛び立っていく空港で、小さな蝶が呆気なく潰れて死ぬというのはなんとも皮肉であり、無慈悲である。その様子を描写している ‘barberblad’ (剃刀の刃) という表現は、生き物を形容するときの温かみや柔らかさとは全く対照的に冷たく鋭利で、蝶がその命を失いもはや生き物ではなくなってしまったということを読み手の感覚に訴えかけてくる。

第二連は都市を結ぶ幹線道路の風景について述べている。「カーペットランド」とは、デンマークの敷物類を扱う量販店である。幹線道路の一本道をひた走っていると、その大型量販店のチープな外観が視界の端をよぎる。それもひとつ見たかと思えば、しばらくしてまた目に入ってくる。繰り返される光景に悪い夢を見ているかのような感覚を覚えているのである。

【現実と非現実の交錯】

第一連と第二連は、現実と非現実が交錯しているという点で共通している。第一連は一見、実際の風景を写しとったように感じられるかもしれないが、コペンハーゲン空港には第3ターミナルまでしか存在せず、世界の主要な空港を見てもターミナル数は2, 3ほどであるため、「13番ターミナル」は架空のものであるのではないかと考えられる。また、13は西洋

において不吉ともされる数字であるが、その「13番」がまるで現実に存在するかのように挿入されている。空港のガラス窓，という具体性のある描写に対し、「13番」という数字だけが非現実を匂わせ、第一連で描かれる光景が現実なのか幻覚なのか判断することができない。

第一，二連は，抽象的な表現も相まって，現実が非現実に侵食されているかのような感覚に読み手を陥らせる。

3. 第三連・第四連・第五連

【各連の分析】

第三連以降は，率直で分かりやすい表現が続く。第三連では，身だしなみを整える，願いごとをするといった，日常に対する「希望」が切り捨てられることに対する恐れが抱かれている。少しの外出に身だしなみを整えることも，小さな願いごとをすることも，必ず行わなければならないことではないが，そうした些細な行為が人の心を豊かにし，日々に希望を与えている。しかしそんな些細な行為に割く余裕さえないほど，心が荒むこともままあることなのだ。

第四連に表されているのは，努力や準備が水の泡となったときの憤りと失意である。この短い文章から感じられる，半ば自棄ともとれる投げやりな印象は直前の第三連とも通じるところがある。そして，努力がふいになるようなことが積み重なれば，希望をもつことや期待をかけることをやめってしまうのも無理ないだろうと思わされる。

第五連では，廃れゆく地方都市の典型がリアルに描き出されている。街はかつての賑わいの影を残したまま風化していく。この寂れた地方都市の活気のなさは，第三連で描かれる気怠い生気のなさと似ている。街も人の心も，ゆるやかに朽ちていくのである。

【日常の中で少しずつ死んでいくもの】

街が衰退していくように，長い人生を生きるうち，人のもつ希望や活力も削ぎ落とされ，すり減らされていく。心身の不調，他者への失望の累積，要因はさまざまあるだろうが，日々の中で感情や感性が磨耗していき，少しずつ心が死んでゆく。

第三連から第五連では，豊かさが街や人の心から失われていくことを恐れつつも，その衰退の様子を生々しいほどのリアルさをもって描写している。

4. 第六連

【分析】

第六連は内容としては不明瞭な部分が多い。「ドア」とは、「お前」とは、「死んでいる」とは、具体的に何を指すのか。

しかしなにがどうあれ、「お前」はもう「俺」のもとにはなく、永遠に失われてしまったということは明らかである。そして「俺」はその現実から目を逸らし続けている。自分の望まない、都合の悪い現実を目の当たりにして叩きのめされることを恐れているのだ。

【現実からの逃避】

この現実からの逃避こそが、詩全体で描かれるものの根底にある要因なのではないだろうか。

現実から目を背け続けているということは、言い換えれば、現実についての思考を意図的に遮断しているということだ。そして長い年月深く考えることを忌避し続けることで、感覚や思考は鈍麻していく。鈍麻した感覚は現実と非現実のあわいを容易に曖昧にする。あるいは、日々の中で少しずつ感性や意欲を奪って行って、やがて心を殺していく。

第五連までの描写は、「俺」に関しては、現実から目を背けることで鈍麻した感覚と思考の引き起こした現象であると解釈することができるのではないだろうか。

インターネット上の資料

国土交通省．海外空港の実態について．

<https://www.mlit.go.jp/common/000040248.pdf> (2024年2月5日最終確認)

XXI

Det bedste er når mørket som et blækblåt pulver løsnes
i sommernattens transparente væske
så gløden i den store, stille huses lys
fortættes og mættes minut for minut

at de største erkendelser hver gang falder
med samme diskrete klarhed som lyden
af en dråbe der rammer stålvaske bund
er det bedste

det bedste er at slukke alt lys
og lytte til radioteaterets stemmer
mens apparatets lille uldne
øje pulserer i mørket

ord som sukkerkold, snerle og Zephyr er bedst
og bedst er lugten af halvrådne efterårsblade

Nordre Frihavnsgades nederste stykke
hvor vinden hyler op fra havnen
og s-toget raser forbi i tredjesals-højde
er bedst

det bedste er at gi op omsider
og pludselig mærke det hele begynde:

Det er det bedste for mig.

最高なのは藍色の粉の闇が
夏の夜の透明な液体の中で溶けていくとき
大きく静かな家に残る灯が
刻々と凝縮され、濃縮されていく

ようやく腑に落ちたと実感するたび
控え目ながら明瞭な音がする
その音は水滴が鋼の流し台の底をたたく音とおなじだ
それが最高だ

最高なのは、
すべての明かりを消して
ラジオ劇場の声に耳を傾けること
ラジオ機器の小さなどんよりした目が
暗闇の中で震えている

低血糖、つる科植物、ゼファーといった言葉が最高だ
そして半分腐った秋の葉っぱの匂いが最高だ

Nordre Frihavn 通りのどん詰まり
風が港から吹き上げ
郊外電車が4階の高さを駆け抜けるところ
それが最高だ

最高なのは、ついにあきらめて
突然すべてが始まるのに気づくこと

これが俺にとっての最高なこと

(田辺欧 訳)

第一部

北欧の詩

スウェーデン編

Karin Boye (1900-1941)

Jag vill möta ...

Rustad, rak och pansarsluten
gick jag fram -
men av skräck var brynjan gjuten
och av skam.

Jag vill kasta mina vapen
svärd och sköld
All den hårda fiendskapen
var min köld.

Jag har sett de torra fröna
gro till slut.
Jag har sett det ljusa gröna
vecklas ut.

Mäktigt är det späda livet
mer än järn
fram ur jordens hjärta drivet
utan värm.

Våren gryr i vinterns trakter,
där jag frös.
Jag vill möta livets makter
vapenlös.

私は出会いたい...

武器を身に着け、不動で、装備に覆われて
私は立ち振る舞っていた -
けれどもその鎖帷子は恐れと
恥で鑄造されていた。

武器を、剣を、盾を
私は投げ出したい。
あらゆる激しい敵対が
私の冷気だった。

最後に、乾いた種たちが芽吹いたの
を見た。
萌黄色の草木が伸びていくの
を見た。

そのか弱い生命は
鉄以上に力強く
大地の心から湧き芽吹いて
むき出しにさらされる。

私が凍えていた冬の地域に
春が曙を告げる。
私は生命の力に出会いたい、
武器を手放して。

(出典： Härdarna, 1927)

(影山翔士 訳)

1. 音韻・文法・概略

本稿では Karin Boye が著した詩集 *Härdarna* に収められている一遍の詩 “Jag vill möta ...” の分析と考察を目的とする。1 節において音韻と文法の特徴のほか概略として詩の大意を示す。2 節では本文を順に読解する。3 節で詩の内容についてまとめたのちに、その内容を実際の生活に即して、本作品にどのような価値が見出されるか思索する。

この詩をよく精読すると定型詩であることがわかる。すべての連において、第 1 行と第 3 行は 8 音節で、第 2 行と第 4 行は 3 音節で構成されている。また脚韻にも注目すると、それぞれの連において、第 1 行と第 3 行では語末の 2 母音が、第 2 行と第 4 行では語末の 1 母音が脚韻をふまえている。2 母音分の韻を対応させていることから、音韻の点から精巧に創られた詩だといえる。

また文法に着目すると、文法規則から外れていて難解な箇所はとくに見受けられず、大半において主語・動詞・補語または目的語の順に並んでいる。後述する第 4 連の修飾関係のように、解釈の判断が難しい箇所があるものの、全体として読解時に文法に起因した難解な部分は少ない。

詩の大まかな趣旨は、それまで恐れや恥といったもので恐々としていた語り手の私が生命の力に出会いたいと渴望している、と把握できる。そのメッセージは一読しておおよそ伝わってくるもので、読者からの解釈を拒むような詩ではない。

2. 本文の読解

2 節では第 1 連から順に、難解だった箇所をどう解釈したのかも含めて、それぞれの連を読解する。

第 1 連では詩の語り手である私が堅牢堅固な様子でありながら、実はそれが恐れや恥で身をまとっているにすぎず、内面では怯えていることを、物質的な装備品のイメージを通して表現されている。ここでは第 2 行の ‘gå fram’ が問題となった。この ‘fram’ を一般的な副詞の意味で用いるのなら ‘gå fram’ をその意味通り「前に踏み出す」と読めるが、一方で ‘fram’ を小辞とした小辞動詞とみなすと「顕れる、ふるまう (=uppträda) とも読め、どちらがより詩にふさわしいか問われた。ここでは語り手が恐れや恥

といったもので覆って怯えていることから、「前に踏み出す」といった前向きな姿勢を示す前者の解釈よりも、後者の意味で解釈した。

第2連ではそういった覆いを拭き去りたいという心情が吐露されている。第3行と第4行では翻訳自体は難解ではないものの、意味が理解しにくい点で問題となった。冷気があるということは、どこから吹き出してくるということなのだが、それがどこからなのかこの一文では理解しがたい。私の冷気とは、私が発している冷気のことなのか、それともどこから別の冷気があり、それが私にとって冷気なのか。ここでは所有代名詞である‘min’に立ち返り、冷気を所有している私ということで前者の解釈をとった。すると語り手の私はあらゆる激しい敵対を有していたとなる。この属性は第1連でみた語り手が怯えている様子とも合致すると解釈することもできる。

第3連も翻訳自体に難しい場所は見受けられないものの、本作品のテーマとの関係が最も不明瞭に思った箇所だった。後述の第5連は本作品における主題となり、そこで扱われている生命の力は、その前の第4連でたくましく語られている。この第3連は第4連の前置きとして、生命が芽吹いていく様子を描写しているという点で本主題と関係があると解釈した。仮にこの連がなかったとしたら、生命が種から吹き出て成長していくというイメージが盛り込まれることなく、第4連へのスムーズな理解が困難なように思う。また最後に(‘till slut’)とあるが、何の最後なのかが不明瞭だった。この第3連の様子は第5連の春の曙と合致することから、私が身を覆って冷気を吹き出している冬の終わりと捉えた。

第4連では生命はか弱いもののようにみえるが、鉄のイメージや無防備といった語彙を用いることで、実は生命独自の力強さを秘めていると唄っている。ここでは第3行が第1行か第2行のどちらに修飾するのか、そしてそれと関連して‘hjärta’の訳が課題となった。‘hjärta’は中心・核・心といったような訳が修飾先との関連で考案された。すなわち第1行に修飾するのならば、か弱い生命は大地の心から湧き出たと解き、第2行に修飾するのならば地球の中心(または核)から湧き出た鉄以上にか弱い生命は力強いと解く。前者では第2行と同等の関係で第1行に修飾するが、後者では第3行から第1行へ順に修飾して読解することになる。ここでは詳細に記述されている鉄よりも、主題となるか弱い生命のほうに多くの記述を割いている前者の解釈を用いた。前者の解釈を採用したうえで、中心でも核でもなく心と訳したのは生命と大地との一体感を最も精神的に表現できて

いると感覚的に考えたためである。

第5連ではこれまで自分の身を包んでいた武器を手放して、生命の力に出会いたいという決意が、希望を漂わせる情景とともに素直に表現されている。最後の行の‘vapenlös’はそれまでの連と同様に3音節でありながら、一語のみ置くことで武器を手放す決意をより際立たせていて、より効果的に表現されている。

3.まとめ・本作品と読者の関係

以上の読解から次のような趣旨が読み取れる。語り手の私は恥や恐れで怯えているが、それらと決別して強かな生命の力に出会いたいと渴望する。そして前者は武器・装備または冷氣・冬、後者では種・草木・春・曙といった比喻を用いてその心情を謳っている。

本作品の趣旨をまとめると以上になるが、趣旨をまとめる程度では本稿の存在意義は薄いといわざるをえない。なぜなら文学作品の分析とは、単なる調べ学習ではなく、作品を出発点にしてさらに内容を発展させることを目的とすることもある。そうすることで新しい価値を生み出すこともできる。ここでさらに作品の趣旨と読者の関係を念において思索を深めていきたい。

この作品では生命に対する作者の思いが込められている。自分で背負っていた恐れや怯えを投げ捨て、自然の根源に出会いたいと願っているのはたしかに作者の思いである。しかしこれはなにも作者に限定される感覚ではなく、一般読者でも十分想定されうるであろう。都会を離れて自然という豊かさのなかで暮らしたり、移住とまではいかなくとも休暇に自然あふれる場所へ訪れことは一般的なことである。なぜ人々は自然との出会いを望むのか。その一つの解は本作品を読むと直感的に理解できる。

しばしばなにかしら難局や苦悩に直面したときに自然への回帰を促すような箴言や呼びかけ・主張がなされるのは、ひょっとすると自然ありふれた場所でゆったりとすごすことで英気を養うだけでなく、生命の力強さを目の当たりにすることで力強い生命と同等に立ち向かう気力を沸かすことに目的があるのかもしれない。生命の力強い様子をまた生命の一存在でもある人間読者と重ね合わせることで、読者の生命力を惹起させる。

したがって本作品は今まで恐れや怯えといった後ろ向きな感情で状況に直面している人々に、自然を通した新しい転換へと導く作品と読むことができる。またこれまで自然に触れ合ってきたことを生きがいとしてきた

人々に対しても，生命の力強さという点で新たな生命との接し方を気づかせる作品と読むこともできる．読者との関係を念においたうえで，本作品にはどういった価値があるのか，思索するとすれば以上のようなになる．

I rörelse

Den mätta dagen, den är aldrig störst.
Den bästa dagen är en dag av törst.

Nog finns det mål och mening i vår färd-
men det är vägen, som är mödan värd.

Det bästa målet är en nattlång rast,
där elden tänds och brödet bryts i hast.

På ställen, där man sover blott en gång,
blir sömnen trygg och drömmen full av sång.

Bryt upp, bryt upp! Den nya dagen gryr.
Oändligt är vårt stora äventyr.

うつりゆく中で

充実した日. それは, 決して立派ではありません.
一番偉大な日. それは, 渴いた日です.

私たちの旅には, 目指す場所や意味がある
でしょう-
でも, それは苦勞の価値がある道のりです.

一番偉大な目標は, 夜通し休息すること.
火が灯り, パンがせつせと食されること.

そこで, ほんのちょっと眠ると,
眠りは安らかで, 夢は歌に満ちるでしょう.

起きて, 起きて! 新しい日が来ました.
私たちの大冒険に終わりはありません.

(出典: *Härdarna*, 1927)

(新谷日和 訳)

1. 作者紹介

Karin Boye (カーリン・ボイエ, 1900-1941) は 1900 年にヨーテボリ・ブルジョワ階級の家庭に生まれる。幼い頃から読み書きを学び、おとぎ話の世界に没頭する。1909 年, 家族はストックホルム郊外 Huddinge に移り住む。豊かな高校時代を送り, キリスト教協会のサマーキャンプに参加した際には, キャンプのリーダー Anita Nathorst と温かい友情を築く。1920 年, ボイエはオーリンスカ女学校を卒業し, 神学校で小学校教諭になるための訓練を始める。しかし, 小学校教諭になることには惹かれず, 神学校での経験からキリスト教信仰, 異性愛からも離れる。その後, ウプサラ大学, スtockホルム大学でギリシャ語, 北欧言語, 文学史, 歴史を学び, 卒業後は臨時教員としての職を得る。

ウプサラ大学在籍時から, 作家としての活動を始め, 1922 年に初詩集『雲』*Moln* を出版する。『雲』*Moln* では, ニーチェの影響を大きく受け, 自己が人間像と倫理のために闘うことができる素晴らしさを表す。第二作からはニーチェの極端な個人主義思想から離れる。“I rörelse” が収められた第三作『火床』*Härdarna* は, 火をテーマとしており, 恐れと恥で作られた装備を捨て, 武器を外した生命の力との接触に立ち返る新たなイメージを創造する。第四作以降も男性中心主義の思想からは離れ, 古来の神話やそこに描かれる強い女神や女性像に影響を受ける。

作家活動と同時に, ボイエは *Clarte*, *Spektrum* を含むいくつかの団体に記者や編集者を務め, 団体の思想や時代を反映した記事やエッセイを書く。また, 1931 年以降は自分自身のセクシュアリティを明らかにし, 「新しい女性」として自らを表す。彼女はスタイルを変え, 痩せてスリムになり, 髪を黒く染め, 時には紳士服を着る。権威から解放される場として芸術や文学を捉えていた彼女は, 戦間期のドイツでの全体主義や言論統制を批判する。1940 年に出版された最も著名な作品『カロカイン』*Kallocain* では, 言論の自由を奪われることに警鐘を鳴らす。以上のように, 作品, 団体, 個人での活動を通じて, ボイエは権威と男性中心主義社会への抵抗, 強く解放された女性像を訴え続けた。

2. 詩の分析と解釈

2-1. 詩の特徴と構造

「うつりゆく中で」「I rörelse」は『火床』*Härdarna* に収められている。この詩は五連で成っており、一連は二行で構成されている。第一連から第五連まで全て韻を踏んでいることが特徴だ。簡単で分かりやすい言葉で綴られた一篇の奥深さについて、詩の貫くテーマである「旅」と「一日」に着目して解釈する。

2-2. 「旅」

この詩の貫くテーマとして、「旅」が挙げられる。第二連、第五連によると、この詩における「旅」は「目指す場所や意味がある」もので、終わりはない。これらから、この「旅」とは「人生」を指すと考えた。

また第五連では「旅」を「大冒険」と肯定的に捉えている。また「私たち」という表現を使って「起きて、起きて！」と呼び掛けていることから、この詩は「人生」という大きなテーマについて、読者に送ったエールだと位置づけた。

2-3. 「一日」

この詩で描かれているもう一つのテーマとして、「一日」が挙げられる。「旅」＝「人生」には目的があり、そのために一日をどう過ごすのが良いか、第一連、第三連と第四連で書かれている。

第一連では、人生の目標にたどり着くために毎日渴きを感じて、歩み続けることが重要だと述べられている。第一連一行目にある‘mätta’は、満腹である状態、転じて満ち足りて充実していることを意味する。一方、第一連二行目にある‘törst’は、水分が足りていない状態、何かを求めるも得られず、欲望・欲求が高まることを指す。この詩は、より良い人生の在り方について描かれているため、今回はどちらの単語も後者の意味で解釈する。ボイエによると、「充実した日」は最も立派な一日ではない。「一番偉大な日」は、「渴いた日」だ。

乾いた日、求めるものが得られない日がなぜ一番偉大だとされているか考察する。第二連で、人生には目指す場所や意味があり、苦労の価値がある道のりだとボイエは述べている。求めるものが得られない状態に苦痛を覚えるが、それを得るために人は前進できると考えていたのではないだろうか。ボイエ自身、現状をよしとせず、人生を通してより

良い社会像を訴え続けた作家だ。彼女にとって、求める状態が得られないことは苦痛ではなく、むしろより良い社会を構想し、作品や活動で昇華するエネルギー源となっていたかもしれない。

一方、第三連では、人生において、親しい人と時間を過ごし、夜通し休息することも重要だと述べられている。第三連二行目で描かれている「火が灯り、パンがせっせと食されること」という表現からは、一日の終わりに家族や友人、パートナーと食事を摂る温かい情景が想像される。第一連では人生の目標地に向けて一日一日歩む重要性を説き、第三連では一日をやり遂げて夜通し休息する喜びについて描くことで、詩のメッセージに緩急がついている。

第四連では、一日をやり遂げた後の眠りは安らかで、夢は歌に満ちると描かれている。しかし、この詩はここで終わらない。第五連では、また朝が来る。「起きて、起きて！」と呼びかける。目指す場所にたどり着くまで、今日も人生という大冒険を始めようとエールを送る。

2-4. まとめ

「うつりゆく中で」「I rörelse」では、日々移り変わる人生を旅ととらえ、一日を積み重ねることで、人生の目標地にたどり着くとされている。目指す場所にたどり着くために、渇きを感じて毎日前進すること、一日を最後までやり遂げて夜通し休むこと、緩急のついたこの二点をボイエは推奨している。また前者には、ボイエ自身の人生観が反映されていると考えられる。

全体を解釈した上で読み返すと、人生のうつろい、ダイナミズムを短い一篇から感じ取ることができる。ボイエは時代や権威に抗い続けた革新的な作家である一方、精神的に不安定な側面も持つ。しかし、この詩の分析を通して、一日を着実に歩む姿勢を持とうとし、詩に表そうとした人でもありと分かり、多面的な彼女の魅力を知ることができた。

インターネット上の資料

Svenskt kvinnobiografiskt lexikon, “Karin Boye”,

<https://skbl.se/sv/artikel/KarinBoye> (2024年1月14日最終確認)

Hur kan jag säga...

Hur kan jag säga om din röst är vacker.
Jag vet ju bara, att den genomtränger mig
och kommer mig att darra som ett löv
och trasar sönder mig och spränger mig.

Vad vet jag om din hud och dina lemmar.
Det bara skakar mig att de är dina,
så att för mig finns ingen sömn och vila,
tills de är mina.

なんと言ったらよいか...

あなたの声の美しいことをなんと言ったらよいのだろうか。
私に分かるのは、ただそれが私を貫き、
一枚の葉のように私を震わせ
私をずたずたに引き裂いて吹き飛ばすのだということだけ。

あなたの肌とあなたの四肢の何を知っているのだろうか。
それらがあなたのものであるということが私をただ打ち震えさせ、
それゆえに私にはひと時も安息の時はない、
それらが私のものになるまでは。

(出典：För trädets skull, 1935)

(水崎千尋 訳)

1. 「木のために」 “För trädets skull”について

「木のために」 “För trädets skull”はスウェーデンの詩人・作家である Karin Boye が 1935 年に出版した詩集である。ボイエはこの作品において、当時の社会規範、とりわけ規範的な女性らしさに関して、それらに縛られない新たな形の性別規範を表出した。また、ボイエが生きた当時はヒトラーを発端とする全体主義の影響で書籍を自由に刊行することが出来なかった。彼女は当時のこのような社会に反発し、詩や小説といった芸術作品は、社会に排斥されたものが自由に表現される重要な場であると考えた。

「木のために」が出版される頃、ボイエは精神的・政治的な葛藤を抱えていた。彼女は 1931 年にベルリンに渡り、精神鑑定を受け、スウェーデンに戻ると、レズビアンであることをオープンに生きること、当時の性別規範にとらわれない「新しい女性」として自身を表したという¹。「木のために」では、このようなボイエの「新しい女性」像が、「木」というモチーフに結びつけて描かれている。しかし、彼女の思惑とは異なり、この詩集は当時の社会の男性的な視点や性的規範の中で受容されていった²。

2. 詩の解釈

この詩は、「あなた」‘du’に強い想いを寄せている「私」‘jag’という人物の心情が描かれている。第一連では「あなた」の声について、“den genomtränger mig”(それが私を貫き)，“och kommer mig att darra som ett löv”(一枚の葉のように私を震わせ)，“och trasar sönder mig och spränger mig.”(私をずたずたに引き裂いて吹き飛ばすのだ)とうたわれており、身を打ち滅ぼすほどの強い感情が読み取れる。このように相手を想うがゆえに不安定になるという心の弱い部分が散見される。これらは一見すると、男性に恋愛的な意味で焦がれるといった女性的な振る舞いのように思われる。しかし、「あなた」は男性であるとも女性であるとも考えられる。ボイエがこの詩集において、規範から抜け出した新しい性別規範を描こうとしていたことを考慮すると、この詩では「あなた」は「私」が強い想いを抱いた人物であること以上に特徴を断定できず、「あなた」にどのような人物を重

¹ Den Nya Kvinnan(Domellöf, 2018, s.3.)

² Domellöf, 2018, ss.1-4.

ね合わせるかは、読み手に委ねられた部分であると考えられる。

次に、「私」を一枚の葉‘ett löv’に見立てているところに着目する。この詩が「木のために」という詩集に収められていることから、木と葉というモチーフについて分析する。一本の木には複数に分かれた枝の先に無数の葉がついている。つまり、「私」を葉に見立てることで、「私」と木を結びつけ、木から枝分かれした一部である「私」という関係性を示唆していると考えられる。木は時に神秘的な意味づけがなされ、畏怖や崇拝の対象とされてきた。とりわけ北欧神話は樹木崇拝の頂点をなす神話だと言われており³、北欧的なコスモロジーは、ユグドラシルという巨大な世界樹を中心に、天・地・下界の三つの世界で構成されている⁴。北欧神話では、人間もまた樹木から生み出されたと考えられている⁵。よって、木と「私」という人間を結びつけることは、「私」の存在を北欧の宇宙観における大いなる源流・根幹の一部の中で見出しているという解釈ができる。

3. まとめ

ボイエは男装をしたり、レズビアンであることを公表したりと、当時の性的規範から離れた行動をとり、「新しい女性」を表現した。一方でこの詩では、いわゆる男性に守られないような強い女性像ではなく、女性的な弱さの側面が見られる。しかし、むしろそのような弱さをあえて隠さずに書いたという見方もでき、それこそが彼女の「新しい女性」像の探究における一つのアプローチであったと解釈することもできる。そして、弱さを持つ「私」を「一枚の葉」に見立てることで、木という生命力に満ちたお大いなる存在と結びつけた。また、「私」をボイエ自身と仮定したとき、一枚の葉となって木の一部となっているのはボイエである。ボイエは混沌とした社会においてキリスト教からも離れ、北欧に古来からある樹木信仰に自身の思想の拠り所を得ようとしたのかもしれない。

参考文献

正道寺康子。年代不明。「樹木と異人」。31-36。出版地不明。

³ https://fika.cinra.net/article/202009-komisugihara_shzwm(2024年1月13日最終アクセス)

⁴ ハストロプ。1996。s.19

⁵ 「そもそも、人類が樹木から誕生したとする神話もある。北欧神話 11 では、最初の人間の男性アスクはトネリコの木から創られた。女性エムブラはニレの木から創られた。彼らはミズガルズに住む人間の祖先となったという。」(正道寺, s.36)

K・ハストロプ．1996．『北欧の世界観』（菅原邦城・新谷俊裕訳）．東京：東海大学出版会．

インターネット上の資料

Domellöf, Gunilla . 2018. Karin Boye, Svenskt kvinnobiografiskt lexikon.
<https://www.skbl.se/sv/artikel/KarinBoye>(2024年1月13日最終アクセス)

コムアイと北欧神話の専門家が語る。人々はなぜ自然を信仰する？

https://fika.cinra.net/article/202009-komisugihara_shzwm(2024年1月13日最終アクセス)

Nattens djupa violoncell

Nattens djupa violoncell
slungar sitt mörka jubel ut över vidderna.
Tingens töckenbilder löser sin form
i floder av kosmiskt ljus.
Dyningar, lysande långa,
sköljer i våg på våg genom nattblå evighet.
Du! Du! Du!
Förklarade lätta materia, rytmens blommande
skum,
svävande svindlande drömmars dröm ,
bländvit!
En mås är jag, och på vilande sträckta vingar
dricker jag havssalt salighet
långt östan om allt jag vet,
långt västan om allt jag vill,
och rör vid världens hjärta -
bländvitt!

夜の深いチェロの音

夜の深いチェロが
その暗い歓声を広い世界に鳴りわたらす。
靄がかる物体の像は宇宙の光の河の中
その輪郭を解き放つ。
長く、黒光るうねりが、
紺青の永遠をあらう。
あなた！あなた！あなた！
至極軽いもの、リズムの咲く泡

たゆたい、眩めく夢のまた夢
まばゆい白！
私がかもめ、休ませている広げた羽の上の
海塩の至福を飲む。
私を知る全てのはるか東、
私が欲す全てのはるか西、
そして世界の心に触れる—
まばゆい白！

(出典：För trädets skull, 1935)

(松岡咲夏 訳)

1. 作品について

「夜の深いチェロの音」“Nattens djupa violonncell”は, Karin Boye (カーリン・ボイエ) が存命の 1935 年に出版した最後の詩集「木のために」“För trädets skull”に収録される作品である。しかしながら, 初出は 1932 年の *Spektrum* 創刊号であり, 当時は無題であったこの作品にタイトルをつけられたものが「夜の深いチェロの音」である。彼女自身について言えば, 1931 年に夫 Leif Björk と離婚し, 1930 年代前半は *Spektrum* の共同編集者であった Josef Riwkin と深い関係にあった。Leif Björk との結婚生活は友達関係から派生したようなものであったが, Josef Riwkin に対しては恋愛感情を告白している。その後 1934 年ごろにはレズビアンであることをオープンにして, Margot Hanel という女性と共に生活を始めた。「夜の深いチェロの音」が発表され, 再掲されたタイミングはいずれも彼女が私生活において大きな転換点を経験した直後だといえるだろう。本稿では彼女の私生活の転機をふまえて, 「夜の深いチェロの音」の世界観を読み解いていきたい。

2. 詩全体の表現について

他の作品と大きく違う特徴の一つに, 詩の構成の仕方が挙げられる。押韻が目立つ作品ではないが, 実際には別の方法でリズムを生み出すことができる。それは連で区切らず, いくつかの行では行頭を下げて連ねていることによってである。特に法則性がないように感じられるが, この行頭下げが二次元の文字列にどこか流れを生み出す効果がある。

また, 神秘的な対比表現も目を引く。夜のチェロの音から始まるこの詩は, 最終行でまばゆい白という表現で締めくくられる。「夜」「暗い歓声」「紺青の永遠」など, 全体的に暗く, 闇のイメージを持つ言葉が多い前半に対し, 第七行「あなた! あなた! あなた!」を境に後半は「まばゆい白」「宇宙の光」「至福」など, 明るく開放的な言葉が並ぶ。暗闇の中で始まるこの対比の間をチェロの音や「光の河」「うねり」「リズム」などが流れ, たゆたい, そして「まばゆい白」に向かっていく。対比表現をもちいながらも, これらたゆたうものの効果で連続性のある展開がなされる。

3. ‘mås’が象徴するものについて

‘En mås är jag’という倒置表現が出てくるが、倒置が意味するのは強調の意思である。では「かもめ」とはいったい何を象徴するのか。かもめは生態的に水辺の生き物であり、比較的広範な地域に生息するものの、渡り鳥である。ギリシア神話では海の女神レウコテアの霊鳥であり、彼女がかもめに姿を変えて海でおぼれかけたオデュッセウスを救う話がある。自由に空を行き来する、女神の鳥なのである。チェロは暗い世界で音を奏で、その音こそ広く世界に鳴り響くものであるが、チェロ自体は自らの意思で動きはせず不動である。一方でかもめになった私はその翼でどこまでも飛んでゆける。チェロよりもさらに自由なのである。初めて世に出した時は「本当の恋愛」を知ったと告白した恋愛関係の、二度目に世に出した時はレズビアンであることを明らかにした恋愛関係の始まりのタイミングだったことを考えると、かもめは本当に自由で、解放感を抱く私を表すのではないか。暗く、ものもはっきり見えない閉じた世界や思いから抜け出せたのが私というかもめなのである。そして飛べるようになった私は、さらに先の世界に手を伸ばせるようになるのだ。

4.まとめ

ボイエがこの作品を二度目に発表したときも、閉ざされたメンタリティや状況からの解放を神秘的に描く表現には手を加えられることなく、名前を与えられるという変化があるのみだった。しかし、ボイエの作品に対する心境そのものは、Spektrum に発表した時と För trädets skull に収録した時では違った重みを持っていた可能性がある。一つの作品の解釈は、時を経ることで作者の中でも変化しうる。「夜の深いチェロの音」は二度世に放たれている。これはボイエにとって自身の心の内を最も的確に表せた作品の一つだったことを意味するのではないだろうか。

インターネット上の資料

Svenskt kvinnors biografiskt lexikon, Karin Boye,

<https://www.skbl.se/sv/artikel/KarinBoye> (2024年1月13日最終確認)

Camilla Wallin Bergström, Skeva begär, [https://uu.diva-](https://uu.diva-portal.org/smash/get/diva2:821026/FULLTEXT01.pdf)

[portal.org/smash/get/diva2:821026/FULLTEXT01.pdf](https://uu.diva-portal.org/smash/get/diva2:821026/FULLTEXT01.pdf) (2024年1月13日最終確認)

Hugrún Rúnarsdóttir, Kärleken saknar genus,

<https://skemman.is/bitstream/1946/29871/1/K%C3%A4rleken%20saknar%20genus.%20Karin%20Boyes%20k%C3%A4rleksdikter.%20Hugr%C3%BAn%20R%C3%BAnarsd%C3%B3ttir.pdf>(2024 年 1 月 13 日最終確認)

Gunilla domellöf,I oss är en mångfald levande(s72-73),

<https://litteraturbanken.se/f%C3%B6rfattare/Domell%C3%B6fG/titlar/IOss%C3%84rEnM%C3%A5ngfaldLevande/sida/73/faksimil?om-boken>(2024 年 1 月 13 日最終確認)

世界大百科事典、レウコテア,

<https://kotobank.jp/word/%E3%83%AC%E3%82%A6%E3%82%B3%E3%83%86%E3%82%A2-151410>(2024 年 1 月 13 日最終確認)

Odyssevs vid masten

Bind mig, ni krigare,
vid fartygets mast,
dra till repen
säkert och fast!
Bud eller böner
får ingen höra mer.
Dödens frestelse åt mig,
vaxet åt er.

Vax i era öron,
åran i hand –
er kan inga sånger nå
från farornas land.
Tills vi är förbi och ni
löser mig igen,
har ni ingen hövding
och jag inga män.

Kung Agamemnon,
Hellas' hopp,
skulle styrt – med stum vink
och fast öronpropp.
Aias skulle seglat
vid odjurens sång
djärv bland sina djärva
mot undergång.

Alla är de kungar
så länge de kan.
Ingen utom jag är en
ensam man.

帆柱に縛られるオデュッセウス

私を縛りつけよ、戦士たちよ、
船の帆柱に、
縄を引き締めよ
しっかりと固く！
指令も嘆願も
もう誰にも聞こえない。
死が私を誘惑し、
蠟がお前たちの耳を塞ぐ。

お前たちの耳には蠟
手には櫂 —
お前たちにはどんな歌も届かない
数多の危険に満ちた地からの歌も。
私たちが通り過ぎてお前たちが
再び私を解放するまで、
お前たちに長はいない
そして私に部下はいない。

アガメムノン王、
ヘラスの希望たる彼なら、
舵を取っただろう — 黙って合図を出し
固く耳栓をして。
アイアスなら船を走らせただろう
怪物の歌を聴きながら
その大胆不敵な所業の中でも恐れを知らず
破滅に向かって。

彼らは皆王である
可能である限り。
私の他には誰も
孤独な者はいない。

Starkare än ära
och makt och befäl
lockar mig det vetande
jag äventyrligt stjal.

Knappast kan det nyttjas
i vardagstarv,
knappast kan det skänkas bort
och knappt ges i arv.
Bind mig väl, ni krigare,
men lämna mitt öra fritt!
Allt som hörs och syns och känns
ska bli mitt.

名誉よりも
そして権力や地位よりも強く
私を惹きつける
危険を冒して盗む知識は.

それはまず役立てられないだろう
日々の務めにおいては,
それを贈り物にすることはおろか
遺産にすることもできそうにはない.
さあ私を縛りつけよ, 戦士たちよ,
しかし私の耳はそのままにせよ!
聞こえ, 見え, 感じるものは全て
私のものになる.

(出典 : *De sju dödssynderna och andra
efterlämnade dikter*, 1950)
(佐伯育美 訳)

「帆柱に縛られるオデュッセウス」“*Odyssevs vid masten*”は、カリン・ポイエが最期に滞在した町アーリングソースで見つけた作品であり、作者の没後である1950年に出版された『七つの大罪およびその他の遺稿詩集』*De sju dödssynderna och andra efterlämnade dikter* に収録されている。

題名にある *Odyssevs* とは古代ギリシア叙事詩『オデュッセイア』の主人公である英雄オデュッセウスのことである。イタケの王オデュッセウスはトロイア戦争に参加し功を立てたが、凱旋の途中で多くの災難に見舞われ故郷への帰還に10年の歳月を要することになる。その困難の一つがセイレーンの棲む島を通過することである。この詩では「怪物」‘*odjuren*’とだけ表記されているセイレーンだが、上半身が人間の女性で下半身が鳥の姿をしており、美しい歌声で船乗りを誘き寄せ衰弱死させる怪物である。第1連と第2連で描写されている通り、『オデュッセイア』ではセイレーンの海域を通る際にオデュッセウスは部下の耳に蠟を詰めて歌が聞こえないようにし、彼自身は怪物の歌を聞きたいがために自分の身体を帆柱に縛りつけさせるという方法をとる。オデュッセウスはセイレーンの歌に誘惑されるが身動きが取れず、縄を解くよう部下に命じてもその声は届かない。耳を塞いでいる部下たちはオデュッセウスの様子を見ながら船を漕ぎ続け、無事に海域を抜けたことを判断してオデュッセウスを解放する。ここではセイレーンの島を通る前にオデュッセウスが部下に呼びかけ指示を出す場面を描いている。

オデュッセウスの他にも、古代ギリシアの伝説の英雄が登場している。第3連のアガムノン王とアイアスはいずれもオデュッセウスと共にトロイア戦争に参加しており、彼にとってはよく知る人物である。特にアガムノン王はトロイア戦争におけるギリシア軍の総大将であったことから、彼を讃える文言が加えられている。この二人は、オデュッセウスがおかれた状況に対し他の人物の場合を想像した例として名前を挙げられている。目的を果たすことを最優先し時に無慈悲に映るほど冷静な判断を下すアガムノン王ならば危険を冒さず自分も耳栓をして船を進ませ、勇猛な戦士だが不遜な所のあるアイアスならば恐れることも策を講じることもなく自ら危険に向かって行くだろう、というのがオデュッセウスの想像となっている。このように作中で仮想される両者の行動は、伝説における人物像に

も当てはまっている。そしてオデュッセウスはその二人とは異なり、何より重要なのは王としての権力でも名誉でもない。たとえ自分の指示に従う部下を持っている王という地位を一時的に手放した上に自ら危険を冒しても、何者にも譲り渡す必要のない自分だけの知識を欲する求知心の強さが現れているのが第4連と第5連である。これらもまた、伝説における知略に長け知識を追い求めるオデュッセウスの人物像の現れである。他の英雄の場合に関する記述は『オデュッセイア』にはないため、この部分はボイエ自身が想像したものと考えるのが自然である。彼女は大学時代にギリシア語を学んでいたため古代ギリシア叙事詩や英雄の知識も持っており、したがってそれらの馴染みのある題材を詩に用いたと考えられる。

この詩は、ボイエの他の作品と比較すると勇ましい性質の強い作品である。一連はすべて8行で構成され、また第1連2・4行目の *mast/fast* のように一行おきに脚韻を踏む形が第1連から最後まで例外なく保たれているため、一定のペースで前に進んでいくような効果が現れている。描かれる場面がいわばオデュッセウスの部下に向けた演説であるという面から見てもこの形式は効果的であり、また指導者の演説という点から命令形や断言する表現も多く使われているため、オデュッセウスの毅然とした様子が印象づけられている。さらに、題材が古代の物語であることから、それに合わせるように昔の言葉を使用している箇所もみられる。具体的には、第2連7行目の「長」‘*hövding*’は *ledare*(指導者)、第5連2行目の「日々の務め」‘*vardagstarv*’の‘*-tarv*’は *behov*(必要、義務)の古い表現である。‘*vardagstarv*’については、第5連4行目末尾の‘*arv*’との脚韻も考慮されている。このような詩の構成や細部の言葉選びから、主題となる物語が持つ古めかしさや威厳というものがスウェーデン語にも反映されるよう工夫がなされている。

本稿では詩の前半であるIのみを翻訳と分析の対象としたが、「帆柱に縛られるオデュッセウス」“*Odyssevs vid masten*”は後半としてIIが続く構成となっている。IIでは物語の続きとしてオデュッセウスがセイレーンの島に近づくにつれて歌に惑わされ心が乱れる場面が描かれている。脚韻は前述と同様の形となっているが、IIでは冷静さを失ったオデュッセウスを表すかのように、1連を構成する行数を変えていたり、ずっと一定だった脚韻を崩していたりする箇所が存在する。このように、詩全篇を通して見ても、題材である叙事詩の一場面が作者の知識とそれに基づく想像力によって豊かに表現された詩となっている。

参考文献

ホメロス. 1994. 『オデュッセイア(上)』(松平千秋). 東京: 岩波書店
松田 治. 2008. 『トロイア戦争全史』. 東京: 講談社

インターネット上の資料

Gunilla Domellöf. 2018. *Karin Boye*. Svenskt kvinnobiografiskt lexikon.
<https://skbl.se/sv/artikel/KarinBoye>. (2024年1月14日最終確認)

De mörka änglarna...

De mörka änglarna med blå lågor
som eldblommor i sitt svarta hår
vet svar på underliga hädarfrågor -
och kanske vet de var spången går
från nattdjupen till dagsljuset -
och kanske vet de all enhets hamn -
och kanske finns det i fadershuset
en klar boning, som har deras namn.

黒天使たちよ・・・

黒い髪に、火の花アロンソアのような
青い炎を纏った黒天使は、
奇妙で冒瀆的な問いの答えを知っている -
そして、おそらく彼らは知っている
夜の深みから、朝の光へまで架かる橋
の行方を -
そして、おそらく彼らは知っている
それぞれがひとつになる安息地を -
そして、おそらく存在するだろう
父なる家に、彼らの名を持つ澄み切った
住処が

(出典 : De sju dödssynderna, 1941)

(奥山津久海 訳)

「黒天使たちよ・・・」“De mörka änglarna...”はボイエの死後に編集された詩集『七つの大罪』*De sju dödssynderna* に収められた、神秘的で彼女の精神世界が現れた詩となっている。ボイエは元々キリスト教を信仰していたが、異性愛の概念との違いから独自の宗教観を築くようになり、その複雑な信念が詩に反映されている。

この詩はダンテの神曲をモチーフにしていると思われる。しかしながら、ボイエがキリスト教から離れた背景を鑑みると、タイトルの「黒天使」“De mörka änglarna...”という表現を通じて、「キリスト教から逸脱してしまった異端の人間たち」を象徴していると考えられる。この異端性は詩全体に渡り、様々な象徴やイメージを通して表現されている。この黒天使が、ボイエを含む逸脱した人間を誘うもの、もしくは逸脱した人間たちそのものを暗に表している。またボイエがこの詩を書いたであろう1930年から1940年ごろは世界大戦が勃発し、文学が制限された。その中でボイエは人間が社会から抵抗することから美を見出し、加えて当時の女性観への反感・諦を作品の中で表していた。

「火の花」‘eldblommor’は、南米・南アフリカ原産のアロンソアという花を指しており、異端から生じたものを象徴していると言える。‘eldblommor’は鮮やかな赤色の花であり、正当なものから異端することの異様さ、黒天使の神秘さをもたらしている。同様に、その後にかかる「青い炎」‘blå lågor’は冥界のようなスピリチュアルなイメージをもたらし、異端性をより強調している。「奇妙で冒流的な問い」‘underliga hädarfrågor’は、作品集の名前である7つの大罪にかかわるものであり、「罪を犯した我々への答え」とも捉えられる。詩は異端性から生まれる問いに対する答えを詠っていることがうかがえる。「朝の光までかかる橋」‘spången går från nattdjupen till dagsljuset’は、天国への橋であると同時に、安息地への道筋を指している。ボイエは詩や小説を通じて、異端の者たちにも本来の安息地があるという信念を表現している。これは「安息地」‘fadershuset’や「澄み切った住処」‘klar boning’といった表現とも繋がりがあると言える。

また、この文章の疑問詞‘var’について、「朝の光までかかる橋がどこへ行くのか」という意味で使われているのか、「朝の光までかかる橋そのものがどこなのか」という意味で用いられているのか、明らかではない。しかし、

どちらにしても異端である我々の行き先を表しており、家までの道のりが遠く、普通の人間にはわからない神秘的なものであるのだろう。

‘fadershuset’と‘klar boning’は同じ場所を指しており、異端の者たちにもポジティブな場所が待っていることを示唆している。この「父なる家」は非常に澄み切っており、暗い中にあっても朝の光に帰着できる場所であると解釈できる。異端の者たちが集い、そこで安息が得られる「父なる家」が存在することをポイエは示唆している。

以上の考察を踏まえると、この詩から、「正当から落ちた異端の行き先が‘私’には見えており、暗い世界だが帰るところには朝の光がある。そこには異端の皆が集まる場所があって、安息できる父なる家がある」といったメッセージを受け取ることができる。これはポイエが異端の者たちに対して持つ希望と、異端から生まれる新しい安息の場所への導きを詩に込めたものと考えられるだろう。

第二部

卒業論文・修士論文要約

デンマーク編

目次

1. はじめに
2. 異界と物語形式の関係
 - 2.1. 「異界」という表象
 - 2.2. 物語形式と異界
 - 2.2.1. 民話に登場する異界
 - 2.2.2. アンデルセン作品に登場する異界
 - 2.2.3. 現代作品に登場する異界
3. 作品分析
 - 3.1. “Kong Lindorm ”
 - 3.1.1. 作品考察
 - 3.1.2. “Kong Lindorm” の異界
 - 3.2. “Den Lille Havfrue”
 - 3.2.1. 作品考察
 - 3.2.2. “Den Lille Havfrue” の異界
 - 3.3. “Skifting”
 - 3.1.1. 作品考察
 - 3.1.2. “Skifting” の異界
4. 異界に見られる変化
 - 4.1. 異界との対峙
 - 4.2. 異界が語られる構造
5. おわりに

要旨

民話から現代の文学作品にいたるまで、現実とは異なる世界を描いた作品は数多く存在する。本稿では、そんな「異界」について、物語の中で果たす役割という点に着目して分析する。創作された時代の異なる三作品の分析を通して、異界の描き方や役割に変化がみられる部分、見られない部分を明らかにする。なお、分析対象とする三作品は、日常と異界の差異が対比的に表現されている箇所を焦点を当てることを考察の主眼におくため、日常と異界、両方の世界の往来が物語の中心となるものを選出した。

第二章では、はじめに異界という言葉の定義を明らかにし、主にファンタジー文学研究分野で使用される「異界」の語義を前提として論を進めることを示した。このことを踏まえ、各物語形式で登場する異界についても紹介する。続いて、本稿で扱う *folkeeventyr* (民の物語) と *kunsteventyr* (創作物語) の特徴を示した。

folkeeventyr の特徴からは、一人一人の個人ではなく、共同体の持つ意識が表現されていることが読み取れる。また、“*hjemme – ude – hjem*” (共同体—異界—新共同体) というモデルでは、異界は乗り越えるべき困難の存在する外界として描かれる。一方で、*kunsteventyr* の作品としては、まず H.C.Andersen (ハンス・クリスチャン・アンデルセン) (1805-1875) の創作童話を紹介する。*kunsteventyr* は作者が明確な文学作品で、作品ごとに独自の解釈や描写を盛り込むという特徴がある。アンデルセンは、民話の世界観を土台に、子供が楽しめることを重視した童話を創作した。彼が異界を子供が楽しめる物語の舞台として描いたこと、また、アンデルセン作品の異界には死後の世界という側面が見られることを説明した。同じく *kunsteventyr* の例として、異界を扱った現代作品も紹介した。「現代的なテーマを中心に置きながらも民話を下敷きにする」という、アンデルセンの創作童話と近い描き方がなされている点も考慮し、「取り替え子」“*Skifting*” (Charlotte Weitze, 1996) を取り上げた。

第三章で各作品の分析を行う。まず、北欧の民話「リンドオルム王」“*Kong Lindorm*”では、民話のモデルに忠実な形で異界が登場する。また、*folkeeventyr* の特徴通りに、固有名詞が登場せず、共同

体全体に焦点が当たった語り方がされている。異界は人間社会に対する自然として登場し、ここには二項対立の世界観が表れている。更に、「共同体—異界—新共同体」のモデルを用いて「登場人物が困難を乗り越える場所」「大人になるための通過儀礼」としての異界の役割が表れていることを説明した。「人魚姫」“Den Lille Havfrue”(1837)では、主人公の性格や意思決定の様子など、個に視点の当たった描写が増していることを指摘した。異界は「共同体—異界—新共同体」のモデルに比較的忠実な形で登場するものの、ロマン主義の思想やキリスト教的価値観といった、時代背景を反映した世界観が展開されている。「取り替え子」には個人の描写のさらなる増加がみられる。自然と人間社会の対比は同様に描かれるものの、それらが様々な背景を持つ登場人物の視点を通して提示されている。また、物語の核となっているのが主人公のアイデンティティの問題であり、主人公ははじめに属する共同体が曖昧である。そのため、「共同体—異界—新共同体」のモデルが当てはまらない点を指摘した。

第四章では、第三章で挙げた各作品の異界を比較した。まず、異界に対峙する人物に違いがみられる。folkeeventyr では共同体全体から見た異界が描かれるのに対し、kunsteventyr では個人が異界と対峙する。次に、folkeeventyr では異界と共同体、つまり自然と人間社会の対比構造の間に入るものがなかったが、「人魚姫」ではキリスト教的価値観が、「取り替え子」では個人主義の考え方が媒介の役割を果たしていることを説明した。最後に、三作品を時代順に並べてみると「共同体—異界—新共同体」のモデルがだんだんと崩れてきていることを説明した。

第五章では、これまでの章を踏まえてまとめをおこなった。異界の描き方、役割には三作品に共通な点もみられることをはじめに示した。自然と人間社会を対比する表現はどの作品にも存在する。また、異界が登場人物を成長させるという通過儀礼の役割を果たしている部分も、同様にみられる。これらの共通点にも相違点にもいえることとして、異界は日常と比較して相対的に定義される世界である、という点を指摘した。各々が異界、すなわち「自分にとっての日常とは違う」と感じる世界に思いを巡らすことが、自分にとっての日常を知ることにも繋がるだろうと結論付けた。

Den, der lever stille 『静かに生きる人』 作品研究
— 「ケアの倫理」 から読み解くオートフィクション —

デンマーク語専攻 永瀬さくら

目次

1. はじめに
2. 研究の背景—オートフィクションの流行
3. 作家・作品紹介
 3. 1. リオノーラ・クリスティーナ・スコウ
 3. 2. あらすじ
4. 作品分析
 4. 1. スコウにとってのオートフィクション
 4. 1. 1. フィクションか，ノンフィクションか
 4. 1. 2. 個人的か，社会的か
 4. 2. 「静かに生きた」母の声
5. 考察—「ケアの倫理」に着目して
 5. 1. 自分自身の再創造
 5. 2. 娘を愛さない母
 5. 3. 社会への問題提起
6. おわりに

使用テキスト

参考文献

インターネット上の資料

資料

記事の翻訳

要旨

リオノーラ・クリスティーナ・スコウ(Leonora Christina Skov, 1976-)はデンマーク人女性作家である。2017年に母親との複雑な関係をテーマにしたオートフィクション *Den, der lever stille* 『静かに生きる人』を出版し、一躍人気作家となった。出版前から話題を集めたこの作品は、現在では2万部を超えるベストセラーとなり、多くの賞を受賞している。

本稿では、スコウにとってのオートフィクション『静かに生きる人』の作品研究を行った。スコウは本文中において、この作品の目的は「自分自身の再創造」であると記した。一般的に、オートフィクションは自己探究を試みる個人的な物語とみなされている。しかしスコウのオートフィクションは、単に自己について語るだけのものではなく、他者、とりわけ亡き母へのまなざしに満ちた物語である。それでは、スコウは自己のアイデンティティを確立し直すために、なぜ母について語ったのであろうか。

一方、この作品を通してスコウは、「娘を愛さない母」というタブーに挑んでいる。しかし、自分を愛さない母に復讐しようとしたのではなく、むしろ母の声にならなかった苦しみに耳を傾けようとした。スコウが描き出した母の苦悩や葛藤とは、どのようなものであろうか。そもそも、母はなぜ「静かに」生きなければならなかったのであろうか。本稿では以上の点を検討するとともに、母の声を掬い上げることで、社会のどのような問題が照らし出されているのかを検証していく。

本稿の構成は、以下のとおりである。まず2章では、本研究の背景となったオートフィクションの流行について概説した。3章では、スコウの略歴と作品のあらすじを紹介した。テキストを中心に、スコウのインタビューも参考にしつつ、4章では作品分析を行った。ここではまず、オートフィクションに焦点を当てた。先行研究が示す「フィクションか、ノンフィクションか」および「個人的か、社会的か」という観点から、スコウがオートフィクションをどのように捉えているのかを分析した。次に、スコウがどのように自身の母を描き出したのか、具体的に分析した。4章における分析を通して浮かび上がる問いに対して、5章では「ケアの倫理」と、そこから発展したフェミニズム理論を援用しつつ考察を加え、最後にこの作品の社会的意義に触れた。また、本稿において引用・参考にした記事については、資料にて全文の翻訳を載せた。

以上の分析および考察を通し、スコウのオートフィクションに対して以下のように結論づけることができた。まず、スコウのオートフィクションも、一般的なオートフィクションと同様に自己探究のためのものである。しかし、彼女は自分だけでなく、母についても語った。この点について、アメリカの倫理学者・発達心理学者キャロル・ギリガンの提唱した「ケアの倫理」をふまえたうえで、スコウは他者からの分離を通じた自己ではなく、他者とのつながりを通じた自己を見つけ出し、「自分自身の再創造」を果たしたと考察した。

また、スコウは相反する感情の間で苦しむ母の姿を描き出した。スコウの母は、母でも娘でもない、ただ「わたし」として生きることを望みつつも、母娘のつながりや愛を完全に否定することはできなかったのである。母がその葛藤を口に出すことなく「静かに」生きた背景には、母性愛神話があり、現在でもデンマーク社会に根深く残っていることが、テキストから明らかになった。さらにフェミニズム理論を援用することで、たとえスコウのように声を上げたとしても、女性が抱く苦しみや葛藤が、私的なものとして社会から葬り去られている現状についても指摘した。

他方で、オートフィクションは非常に個人的な物語だとされる。たしかにこの作品も、デンマークという小さな国に生きるある一人の女性の個人的な物語に違いない。しかし、スコウは母の声にならなかった叫びを掬い上げることで、デンマーク社会の問題点を示唆した。したがって、スコウのオートフィクションは社会的な意義を持った物語であると言える。

本稿の理論的基盤としたフェミニズム理論を構築した岡野八代は、自律的主体が隠蔽してきた「ひとは傷つき依存して生きる」という事実を明らかにした。そのうえで、この依存する存在こそが政治学の基礎単位であると論じている。スコウの物語のように、個人的だから、ましてや母娘という家庭内の問題だからと言って社会から捨象するのではなく、むしろそのひとつひとつの「物語」から社会を考えていく必要があるのではないか。

本稿では、スコウが照射したデンマーク社会の問題点を挙げるだけにとどまり、問題の原因や背景についての具体的な研究まで進めることはできなかった。デンマーク社会や制度について、文学だけでなく政治学や社会学の側面からの研究もまた必要である。この点については、筆者の今後の課題として設定し、探求していくこととする。

第二部

卒業論文・修士論文要約

スウェーデン編

目次

1. はじめに
2. 研究背景
 - 2.1. エルサ・ベスコヴの生涯
 - 2.2. エルサ・ベスコヴの先行研究
 - 2.3. エルサ・ベスコヴ画風の確立
 - 2.4. スウェーデンにおける絵本分析
3. 分析手法
 - 3.1. 分析する絵本について
 - 3.2. 分析理論 Painter et al.(2013) について
 - 3.2.1. 対人的機能
 - 3.2.2. 観念構成的機能
 - 3.2.3. テキスト形成的機能
4. 絵本の分析実践
 - 4.1. 『ペレのあたらしいふく』
 - 4.1.1. 対人的機能分析
 - 4.1.2. 観念構成的機能分析
 - 4.1.3. テキスト形成的機能分析
 - 4.2. 『もりのこびとたち』
 - 4.2.1. 対人的機能分析
 - 4.2.2. 観念構成的機能分析
 - 4.2.3. テキスト形成的機能分析
5. 分析結果のまとめ
 - 5.1. 画風からみる考察
 - 5.2. 時代背景からみる考察
6. おわりに

要旨

エルサ・ベスコヴ(Elsa Beskow, 1874-1952)は、19世紀末から20世紀半ばにかけて活躍したスウェーデンの代表的絵本作家であり、20世紀の絵本出版に功績を残したと言われている。スウェーデンに限らず世界中で、彼女の作家像や文章に対する文献は多く見られるものの、絵に対する分析は多くない。その理由の一つとして、絵本の絵を言語的に分析する優れた理論枠組みが確立されていなかったことが挙げられる。その中で、2013年に Clare Painter, J.R. Martin & Len Unsworth らによって *Reading Visual Narrative: Image Analysis of Children's Picture Books* (『視覚的ナラティブを読み解く：絵本の絵の分析について』, 2013) という絵本の絵を分析する理論を提示した著書が発表された。この著書では、絵や文章の構成が読者にどのような効果をもたらすのかを分析した理論に焦点が当てられている。

本稿では、エルサ・ベスコヴの絵本が今日まで支持され続けている理由を明らかにすることを課題とし、ベスコヴの生涯と思想を踏まえた上で、彼女の「絵」そのものに注目して分析する。つまり、ベスコヴの挿絵を Painter, et al. (2013)の理論を用いて分析し、挿絵が読者にどのような効果を与えているのかを明らかにするものである。

第二章では研究背景として、ベスコヴの生涯や画風が成立するまでの過程、また絵本分析の先行研究を紹介した。ベスコヴは幼少期から絵を描くことを好み、この頃から童話や絵本を作りたいと考えていた。また女性解放家エレン・ケイとの関わりもあり、独立した女性観やこども観を持っていたことがわかった。ベスコヴの絵のスタイルは、ウィリアム・モリスやウォルター・クレインの影響を受けている。19世紀後半は植物など有機的なモチーフを用い、曲線で柔らかい色合いの画風が広まり、その影響も受けていた。

第三章では、分析する二冊の絵本『ペレのあたらしいふく』(*Pelless nya kläder*, 1910)と『もりのこびとたち』(*Tomtebo barnen*, 1912)の紹介と、分析理論 Painter, et al. (2013)の詳しい解説を行った。この二冊は同時期に描かれたものでありながら、一方はリアリズム作品であり、もう一方はファンタジー作品である。またともに先行研究が豊富で、比較しやすいことからこの二作品を分析対象として選んだ。

分析理論 Painter, et al. (2013)によると、絵本の絵には主に3つ

の意味機能がある。登場人物同士や登場人物と読者の関係を表す「対人的機能 (Interpersonal Meaning)」, 物語の内容や描写を表す「観念構成的機能 (Ideational Meaning)」, そして絵や文章のレイアウトを表す「テキスト形成的機能 (Textual Meaning)」である。これらの機能について, 例を用いて説明した。

第四章では, 『ペレのあたらしいふく』, 『もりのこびとたち』を「対人的機能」「観念構成的機能」「テキスト形成的機能」の面から分析した。それに加えて分析理論に基づく絵の分析のみならず, ベスコヴの人生や当時の社会状況という観点からの分析も加え, ベスコヴの絵本が読者にどう受容されているかを述べた。

第五章では, 第四章を踏まえ, 明らかになった二作品の共通点と相違点を述べた。また, それぞれの絵が読者に与える効果を述べたのち, ベスコヴの生涯や時代背景を考慮し, 彼女の絵を総合的に考察した。

ベスコヴはキャラクターをロングショットで描き, 一定の距離感を保つことで, 読者に安定した印象を与えている。彼女は 19 世紀後半の画法や日本の浮世絵からの影響を受け, 読者に親しみやすく懐かしさを感じさせる絵を描いている。また, 彼女の絵はデザイン性が高く, 現代の日用品にも広く使用されている。白黒の絵を用いる一方で, 色の統一に工夫を凝らした作品もあり, 彼女の絵は物語の想像力を引き出す配置や分割方法も特徴的であることがわかった。ベスコヴの平面画法は装飾性と写実性, デザイン性を組み合わせ, 独自の世界観を表現している。

また, ベスコヴの絵は 1900 年頃の時代背景を反映し, 手仕事や農村生活に焦点を当てている。彼女は手仕事の重要性を強調し, 社会的変遷に敏感に対応した画風が評価された。性別や社会的立場の描写においては, 当時の男女の役割分担を表現しつつ, その問題にも言及している。絵本は児童中心主義や個性尊重を取り入れ, こどもの自主性を奨励している。またベスコヴの絵本は時代の生活経験に共感を呼び起こし, 大人も楽しめ, 読み聞かせとしても適していることがわかった。

以上により, ベスコヴの絵本はその美的な価値だけでなく, 教育的な視点や当時の思想という点からも重要であることがわかり, 読者に永続的な影響を与えると結論づけた。今回の研究を踏まえて, 絵本を選定する場合や絵を研究する際に必要な「絵の言語化」を可能にしたといえる。

物語作家ラーゲルルーヴの語り
—小説『御者』における登場人物の語りを中心に—

スウェーデン語専攻 水崎千尋

目次

1. はじめに
 2. 物語作家としてのラーゲルルーヴ
 - 2.1. 経歴
 - 2.2. 作風と文体の特性
 3. 『御者』 *Körkarlen*
 - 3.1. あらすじ
 - 3.2. 作品背景
 4. 作品分析
 - 4.1. 登場人物の持つ役割
 - 4.1.1. 浮浪者・ダヴィッド・ホルム
 - 4.1.2. シスター・エーディット
 - 4.1.3. 死神の御者・ゲオルク
 - 4.2. 死神の馭者・ゲオルクの語り
 5. まとめ
 6. おわりに
- 使用テキスト
参考文献
インターネット上の資料

要旨

Selma Lagerlöf(セルマ・ラーゲルルーヴ, 1858-1940)はスウェーデンの文壇で活躍した国民的作家である。過去の研究によるとラーゲルルーヴの物語は死と生, 善と悪, 見えるものと見えないものといった「対極のモチーフ」が用いられることが特徴的である。また, その境界が曖昧になっており, 登場人物はその両極を移動しているとされる。そこで, 筆者はラーゲルルーヴの新たな語り特性として, 相反するものを繋ぐ「仲介者」としての側面を見出せないかと考えた。ラーゲルルーヴの語り特性としてもう一つ挙げられるのが, 「間接的な語り手法」である。彼女の作品では, 地の文の代わりに, 登場人物の台詞の中で物語が展開していくことが多い。とりわけ『御者』*Körkarlen*(1912)は, 対極のモチーフとその超越が, 登場人物, とりわけ死神の馭者による語りによって描き出される。よって『御者』における登場人物の語りの分析を通して, 「仲介者」としてのラーゲルルーヴについて考察するのが本稿の目的である。

1章では, ラーゲルルーヴの語り特性と研究内容を述べた。続く2章では, 彼女の作家としての経歴や作風について述べた。

3章では『御者』の作品背景と物語のあらすじを示した。作品のインスピレーションの元となった小説や北欧の文化的背景などを紹介した。また, ラーゲルルーヴが手紙の中で, 読者に対して「美しいメッセージ」を重視し, 文学作品はあらゆるものを運び込む架け橋であると綴っていると述べた。ここから, 『御者』は作者ラーゲルルーヴが「美しいメッセージ」を読者に伝えるために描かれた作品であると読み取れることを示した。

4章では『御者』における語りを行う登場人物を「語り部」と定め, 登場人物の語りを分析した。それに先立って, 4.1節では, 3人の登場人物のキャラクター性を分析し, それぞれの登場人物の持つ役割について述べた。

まず, 主人公ダヴィッド・ホルムの持つ役割を分析した。彼は酒浸りの落ちぶれた男で, 妻への大きな憎しみを抱えた悪人として描かれる。しかし, それは生前のゲオルクがダヴィッドを酒浸りの生活へ誘い込んだことに起因する。よって, ダヴィッドが生来からの悪人ではないことを述べた。また, 致命傷を受け倒れたダヴィッドの魂は肉体から抜け出し, 「見えないもの」として「語り部」の語

りを静観していることに言及し、彼が「語り部」と聞き手に認識されない傍聴者という役割を持つと考察した。さらにダヴィッドを俯瞰するのが読者であるという語りの構造に着目する。物語序盤は「語り部」によってダヴィッドの過去が語られ、読者だけが新しい情報を受け取る。つまり、両者の認識に違いがあるといえる。物語が進むにつれて、両者は同時に新しい事実を認識してゆく。このような語りの構造により、ラーゲルルーヴはダヴィッドと読者を「姿の见えない聞き手の一人」として徐々に同化させていると考察した。

次に、シスター・エーディットの持つ役割を分析した。彼女はダヴィッドと対照的な「善」なる存在である。一方、彼女がホルム夫妻を引き合わせたことでダヴィッドの妻を不幸に陥れてしまい、妻子がいるダヴィッドを愛していることに言及し、エーディットが完全な善人として描かれていないことを示した。またシスターとして「救済する者」であったエーディットは、魂を解放されることで「救済される者」になったといえる。このように、物語の中で、対極のモチーフの垣根を移動するというエーディットの役割を見出した。

最後に、死神の馭者・ゲオルクの持つ役割を分析した。彼は死神の馭者として魂を解き放つだけでなく、『御者』という物語の全知の語り手であることを示した。彼は物語の一登場人物が知り得ないはずの、他の登場人物の心情を把握している。よって、ゲオルクはこの物語のいわば神の視点を持つラーゲルルーヴと重なる部分を持つ存在で、作者の言葉を代弁していると考察した。

続く4.2節では、物語で重要な位置を占めているゲオルクの語りの場面に焦点を当て、彼の語り方が物語をどのように動かしているのかを分析した。これまでの作品分析を踏まえて、物語終盤でゲオルクがダヴィッドに託した言葉は、ラーゲルルーヴがこの物語を通して読者に向けたメッセージと同一であると述べた。

5章ではこれまでのまとめを述べた。『御者』は、登場人物による語りの構造をとることで、作品自体が読者と作者を繋ぐ架け橋として機能する作品であると位置付けた。以上から、対極のモチーフや物事の持つ二面性の探究の中でそれら両方を受容し、その境界の超越を描くというラーゲルルーヴの語り特性を、「仲介者」と見なすことができると結論付けた。

6章では、ラーゲルルーヴがこの作品を通して伝えたメッセージについての筆者の解釈を述べ、本稿のまとめとした。